
枕営業

may.honda

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

枕営業

【Nコード】

N8809Y

【作者名】

may.honda

【あらすじ】

普段から眠たくてしょうがない高校生の竜崎広界。

彼はバイトしながらせつせと高校生活をおくっていた。

妹の奈緒やダックスの飼い犬のフォンスにオタクな加藤健介、個人的にかかわりたくないクラスの女子、藤咲誇紫に姉思いの妹の藤咲花桜梨と出会ったり、こんなありがちで眠くなるお話が続く。

（縦読みの方がいいと思います）

プロローグ（前書き）

初めて書き終えた作品です。

元々は、もうちょっと改稿してラノベの賞に送ろうとしてた作品です。

センスのなさ投稿するのをやめました。

読んでいて苦痛を感じると思うのでドSな人はご遠慮ください。

wordで書いたのをtextに変換して出したのでルビについては後ろのを見る感じにしてください。

ブローグ

ブローグ

「あーあ、ねむい」

りゅうきじつかい

竜崎広界はいかにも徹夜しちゃって寝てませんといわんばかりの

眠気たっぷりの大あ

くびをしながらつぶやいた。

「コウちゃんはいつもそうだろ。授業中も寝てばかりで」

隣で一緒に登校していた親友の加藤健介が呆れながら声をかけてきた。

「眠いもんは眠いんだよ。グッスリ眠れるやつはいいよなー。何にも考えないで寝られるんだもん」

「聞くけど、お前は何か考えてんのか？ 僕にはちっともそんな感じには見えないぞ」

「俺だって色々と考えてんの！」

「色々ってなんだよ。青色とか赤色とかそんなこと聞いてないからな。ましてや前の女

子のパンツの色とか聞いてないからな」

「それは……。あ、おはようございまーす」

竜崎は加藤に先を読まれて返答に困っていると、ちょうどタイミングよく高校についた

ので、校門の前に立っていた教師陣に挨拶をした。

「おう、おはよう。おい、お前はいつも眠そうな顔してんな。この前のテストとかでも

成績が悪くなかったから俺たち教師は寝ていても何も言わないけど、体には気をつけるよ」

しんどう

体育教師の権藤が体の心配をしてくる。

「そうですねー。体力バカとか単なるバカみたいな権藤先生とは

違うんで、風邪をひか

ないように気をつけないといけないですね」

「風邪をひかないのをそんなに褒めるなよ。俺を褒めても何もでないぞ?」

と、あるワードには全く耳に入らないのかニコニコしながら会話を続けようとしていた。

「これ、他の生徒から没収したエロ本だけど、いるか?」

このオッサン何とかしないとダメだ、と竜崎は思ったが、彼自分には何もできないので

普通に話を続けることにした。

「先生が何をプレゼントしようしてるんですか。しかも、それは生徒から没収したもの
でしょ」

彼は呆れて溜め息混じりに言葉を返す。

「そのまま校則通りに焼却炉に連れて行くよりは本にとってはマシだろ」

権藤はなぜかマトモなことを竜崎へ言い返してくる。

「それだったら、アニメとか漫画みたいなエロ本はコイツにあげてください」

俺は隣にいた健介を親指で指さした。

「そうか、加藤はそんなにこれが欲しいのか?」

一生懸命頷く加藤。

「ん」

権藤が唸^{うな}っている。

竜崎は当然、軽いノリで「あげる」と言ったことを後悔しているんだろうと思っていた。

もしくは「校則に従う必要はない」と暗に宣言してしまったことを悔いているのだろうと
感じた。

「やる。持ってけ。一冊でいいよな?」

権藤は気前よく加藤に本を手渡しした。

「あげるんですか？　唸ってるからやっぱり無理とか当然のことを言うのかと思ってましたよ」

「唸ってたのは何冊あげるかってことだ」

竜崎は本当にこの先生がクビにならないのか心配した。

そのまま加藤は貰い、真新しい白い校舎に足を踏み入れ一緒に教室へ歩いていった。

「恩にKILL」

「誰を殺すつもりだ。もらったカトケンが持ち主に殺されるわ。」

「ま、本はいつも借りてるお礼だよ」

「そうか。次も遠慮なくいつてくれ。喜んで貸してやる」

「おう、頼むぜ」

加藤は本を手にし、見るからに喜んでいた。

竜崎も加藤同様喜んでいたが、それは次も貸してもらえることを確約しているからだ。

だが、彼は少し気になったことがあったから加藤に尋ねた。

「ところで、なんていうタイトルなんだ？」

「この本かい？」

加藤はニンマリとした顔をつくり、なぜかもったいぶっていた。

「早く教えてくれよ」

「教えなーい。それで次はどの人のグッズが欲しいんだ？　それとも薄い本か？　手持ちにあるのなら何でもやるぞ」

胸を張るようにして加藤は言ってきた。

「いや、いつ俺がカトケンの持つてるグッズとかが欲しいとか言った？　しかもタイトルを教えてくれないし、いつのまにか一回は借りてることになってるしさ……」

持つべきものは友だと一瞬でも思った竜崎は溜め息を吐いた。

「いつも借りてんのはカトケンが使ってる授業用のノートだよ」

「やつぱり、コウちゃんはノートがお気に入りみたいだな。あの絵師の絵は良いよな」

「ちげーよ。絵じゃない！」

「え？ ケンちゃん特性オリジナルノートに描いてあるキャラの絵が見たかったんじゃないの？」

「自分でチャンを付けるなよ。それにいつ俺は絵が見たいと言ったんだ」

竜崎は自分の趣味を捻じ曲げられて、勘違いしている彼に立ち向かった。

「俺は、カトケンの授業のノートの中身が欲しいの」

「これかい？」

加藤がカバンから取り出したノートには『おしえなーい。私と彼の秘密』なるタイトル

ロゴとイラストが描いてあった。イラストは男の娘と男の子が向きあっているもので、と

てもその辺で売っているようなものではなく、貼り付けて作成している感じがした。

ともかく竜崎は加藤からいじわるされたのではなかった。

そんな会話をしつつ、教室に入り席に着く二人。

その後もホームルームをはさみ話題に事欠くことなく会話し、授業が始まった。

必死にノートを取る加藤。

必死に惰眠をむさぼる竜崎。

昼になつたら体重などを気にしながら考えて食べる健介。

昼になつたら眠気を誘発するかのように満腹まで食べる広界。

そして午後の授業でも同じような光景が見られた。

竜崎は居眠りをして教師にチョークを投げられようと、出席簿

で叩かれそうになろう
ともすつと目を覚まして、抜群の反射神経で寸前のところでいつも
捕るか避けるか受け止
める。

教師たちは、なぜこんなにもやる気を感じられない生徒が、他の
生徒ができなさすぎと

いうことではないのにあれだけの好成績を取っているのか不思議で
ならなかった。

彼は学年で200人の内、必ず50番以内には入ってくる。

授業中はほとんど寝ているにも関わらずである。

一方、その友人の加藤はトップ10には確実に入ってくる。

教師陣の多くは加藤に山のはり方と勉強を教えてもらっているの
ではないかと思ってい

る。それが事実だとしてもカンニングなどの不正行為をしているわ
けではないので注意す

るわけにもいかない。

それに高校生活で友人関係を築くのも大切であるので口出しする
わけにもいかなかった。

そんなこんなで学校が終わり、友人達とも別れ帰宅途中の二人。

「コウちゃん今日もバイト？」

「そうだよー。その前に犬の散歩にいかないよ」

「そうか、フォンス君いるもんな」

「コンコン。あ、俺こっちだから、また明日」

独特のあいづちを打つと竜崎は手を振り自分の家へ足を向けた。

竜崎はごく普通の一軒家の前に立つと門をくぐり鍵を使い玄関の
中に入る。

「ただいまー」

「おかえりー」の声を確認してから着替えるために自分の部屋に
入る。

その途中でチラつと見えたリビングでは犬が気持ちよさそうにソファーの上を占拠していた。片耳を立てようとすると柔らかい垂れ耳なので持ち上げず、耳をピクピクさせ、片目だけ開けた目でこっちを向き、竜崎であること確認するとまた眠りにつく。

自室で私服に着替え、リビングで寝ていたダックスのフォンスを起こし、散歩に連れていく。

「おい、帰ってきたんだから、ドアの前でしっぽ振って嬉しそうに腹を見せて待つぐらいしろよな」

犬にブツブツつぶやいていたが、返事はもちろん返ってくるわけがない。

首にリード付きの首輪を装着し、家の外にでた。

竜崎はそのまま公園へ歩いて行こうとするが、何かが重い。

犬が座り込んで歩かない……。

「今日は行かないよ、絶対に行かないよ！ テコでもゲコでも使ったって動かないよ」

フォンスはそんな気持ちでカエルのようにお尻を落として座ると竜崎へ上目使いで訴え

るが、そんなことはお構いなしに竜崎は強引に引っ張る。

それでも動かない。

フォンスは気分屋で歩く時と全く歩かない時がある。

今日はどうかやら歩かない日を引いてしまったらしい。

竜崎はしょうがないなと思い、抱っこし途中まで歩く。

しばらくして、公園に行く途中の住宅街の中で降ろすと今度は歩き始めた。

やっと散歩ができると思い、ホッとするとそのまま家まで歩いてくれた。

家につくとまず、フォンスの足を洗い、リビングの中であげて水
を与え、竜崎はバイト
のために自転車に乗り家を出た。

相談屋の人とダイエット

第一章 相談屋の人とダイエット

1

彼のバイト先は相談屋そうだんやなどという、いかにも胡散臭いうさんくさ商売であるが、なぜかお客さんがよく来る。

今日の竜崎の担当は3人だった。

1人目のお客さんは花咲桃子はなさき ももこという事前にもらった資料には高校生とある。同じ高校生

の竜崎が見ても派手な印象を与える若い女性だった。

「最近、彼との仲が悪くて……」

彼氏と別れそうになっているらしく、竜崎の目から見ると相談内容の割にはとても深刻そうな顔をしていたが、竜崎にしてみれば、付き合っている人の話なんてはどうでも良かった。逆に彼はこの女性の彼氏に彼女ができたのか相談を受けながら問い詰めたくなってくる。

「えっと、彼との出会いは？」

「バイト先で知り合ったんです」

「バイト先だとそんなに異性と知り合えるんですか？」

竜崎は自分のバイト先で出会いがないのでバイトの転職も含め、期待して聞いてみた。

「はい、彼が常連で私が接客をして、そのうちに手紙を渡されて彼女が懐かしむような顔になった。

「私、高校生なんですけど、あんなに真っ直ぐな手紙をもらった

のは初めてで……」

「そうですか。そのままの気持ちを伝えればいいんじゃないですか」

「そうですね！ やってみます」

女性は竜崎の簡単な言葉が耳に届いたのか自信を持ったようだ。

竜崎自身はこれくらいなら友達に相談すればいいのにとは口にはださず、見栄っ張りな

のか知らないが、聞くわけにはいかないかったのだらうと推測する。この顧客が大人にな

り、もっと金となる木に成長するのを待つ。

「連絡先を教えるので、できれば私に誰かバイト先が高校の人を紹介し」

竜崎は仕事を放棄気味にそんなことを口にしていたが、彼女が途中で遮った。
さへぎ

「彼が年上で10歳離れてても関係ないですよ。ありがとうございます」

竜崎の話が終わる前に彼女はそう言って話を切り上げると、気分良さそうに部屋を出て

行った。その姿を竜崎は眺めていた。

「絶対、後悔させてやる。警察に電話してその彼氏をムシヨに入れてやる」

竜崎は悔しさからそんなことをブツブツ唱えている。

だが、残念ながらそのようなことはできるわけがなかった。

仮名と本名が選択でき、住所も細かい職業もプライバシーの観点から相談員にはある程

度までしか知らされないからである。

そのすべてを知るのは店長のみであるという、ボロい店の割にはなぜかその辺りをしっ

かり守っていた。

休憩の時間をあけ、次の客は花村真寢得（加盟）と書かれたいた。
竜崎は全国マナー大

好き協会にでも加盟しているのかと一瞬考えたが、99%仮名の誤字である。

メガネを着用し、小太り。

会社の中堅かなと勝手に予想していた。

「実は会社のお金を使いこんでしまつて……」

コンコンと竜崎特有のあいづちを打ちながら花村の話を聞いていく。

具体的には会社のお金で豪遊をしまつたらしい。

簡単に言つと、会社のお金でお酒を飲む場所で遊び呆けたり、アニメのグッズなどを買

いまくつたりしてしまつたらしい。

「使つたお金を返せばいいと思いますよ。親戚に借りるなどして」
竜崎は単刀直入にど真ん中へ投げ込む。

「返せたらとつくに貸してる。それで解決しているのならココにはこない」

と、すつぽ抜けて暴投になつていないのに花村は怒っている。ど真ん中は自分の好きな

コースではなかったらしい。

だが、よく考えれば会社のお金を使つてしまつた方が悪いのではないか。

普通の人ならそう思うが、竜崎達の仕事ではそれを言つてしまつてはお終い（しま）というのが辛いところである。

「じゃあ、地の果てまで逃げればいいと思いますよ」

あつけらかんとした感じで答えた。

「ふざけてるのか君は」

そこまで言つと花村は少し赤くなり机を叩きながら言つてきた。

「その金はどこから来ているんだ。それに地の果てってのはどこ

なんだ」

ますます花村は顔を真つ赤になってきた。
そんな深刻な相談をどこの馬の骨が経営してるのかもわからない
ような場所でされても

困るのだが、竜崎はそんな疑問を持たずに突き放すようにズバつと
こう言い切った。

「それなら皆さんご存じの地獄にでも逃げればいいんじゃないで
すか？ 追ってくる人
もめつたにいませんし。オススメですよー」

聞いた花村は真つ赤を通り越して、顔が青ざめた。

「逃げる経費も安いですし、丈夫なヒモ一本で逃げられますよー。
ひもを使うのなら電

車に飛び込むより、人の迷惑になりませんし。それにもう悩みで苦
しむこともなくなりま
すしね」

花村はその話を聞くと、手で押すと倒れそうぐらいにフラフラ
になり、席を立とうと
した。そんな花村に竜崎は両肩を掴んで座らせ、目をジツと見つめ
てこう言った。

「でもさ、そんなことやって、どうするの？ あなたがそれを実
行すれば、あなたはこ

れ以上苦しまずに楽になるかもしれない。でも、他の人のことはど
うすんだ？ あなたが

首を吊ってるのを目撃した人のショックは？ 奥さんとかいるのな
ら奥さんが死んでしま

ったあなただをどう思うんだ？ それに父として慕ってくれている子
供は？ それに使い込

んまれてしまった金を会社はどうすんだ？」

ここまで一気に相手の身勝手さを論じた。

「あなたの人生は終わっても周りの人の人生はこれから続くん

だぞ」

と、言うてから最後にこう付け足した。

「諦めるな。必死に自分は何ができるかを考えるんだ。しっかり考えたらまた来なさい。」

その時はその道のエキスパートに受けるように頼んでおくから。」

金にならなそうな木ならせめて廃材として使ってしまおう。

そんな店の考えを知らずに花村はポロポロ涙を流したままこの部屋を後にした。

休憩をはさみ、今日の最後のお客さん、ふじさき藤咲さんの番になった。

彼女は何かやつれている印象だった。

何よりも元気がない。

笑顔を見せれば、明るくかわいい印象を与えられるのもったいないなと竜崎は感じた。

「こんばんは。それじゃ座ってください」

竜崎は席へ座るように促した。

「それでご相談内容というのは？」

「最近、ダイエットを始めようとしてたら、無理やり食べさせてられている夢を見たんです。それ以来、食欲がなくて……」

コンコンと、あいづちを打ち話を聞いていく。

ダイエットを希望していたのに食欲を無くしたら相談に来るといふふざけた話だったが、

彼女は真剣な目だった。

「具体的にはどんな夢だったんですか？」

「とにかく太っていて、気持ち悪い容姿のおばけみたいのに食べさせているんです……」

彼女はその容姿を頭に思い浮かべて身震いをしている。

「そうですか。怖い夢でしたね。ちょっと気持ちが疲れちゃっているのかな」

「その夢を見て以来全然、ご飯が食べられなくて……」
彼女は今にも泣き出しそう目だった。

「正夢みたいに夢に出てきたことが現実に起こるわけじゃないんですけど、何か影響してるようで怖くて……」

それを聞いた瞬間、竜崎の瞳孔が開いた。

それから今までの話も含めてメモを執^とり、竜崎も前の二人とは比べられないほど真剣に聞き耳を立てた。

今までにもそのような夢を見たのか、なぜ現実に影響してると感じたのかなどの質問も竜崎の口から出た。彼女は前者のみた内容についてははっきりと答えたが、後者の質問にはあいまいにしか答えられていなかった。

「今日はとりあえず帰ってゆっくり休んで、また同じ夢をみたら来てください」

話を聞き終えた竜崎はそういつて、彼女を帰した。

店の片付けを終え、店長に挨拶と報告をして竜崎は帰宅した。

家につくと風呂に入り、一人遅い夕食を食べ、犬の小使用のペットシートとフォンスが

飲む用の器に水を入れ、それを持ってフォンスを連れ自分の部屋に入った。

フォンスとはいつも一緒に寝ている。

今日も布団の上に乗ったフォンス既にかわいい寝顔を見せて寝ている。

竜崎も横になっているとウトウトしてきて、とうとう寝てしまった。

「おい、もつといいもん食わせろ！ 夕飯の時によこせて言っ
たじゃん」

「うるせー。贅沢言うな。夕飯の時はバイトだったから他の人に
言え。それにいいもん
食いたかったら、普段からもつと歩け」

俺は森の中のポツカリと空いた場所で隣に話かけられた。

「気分がのらなかったんだよ。あと、歩きたくないのに無理に引
つ張っていくなよ。法
律にのつとつて真正面から訴えるぞ。」

引つ張られて歩かされたら誰でもむかつくはずであることは俺で
もわかってる。

「うつさい。とつと歩かないお前が悪い。」

相手の気持ちなんて考えずにそんな言葉を返す。普通に俺は会話
を続けているが、話し

ているのは間違いなくフォンスという名の我が家に住んでいる犬で
ある。

「そもそも、何でワシがお腹を見せて、お前を出迎えないといけ
ないんだ？ ふざける
のもいい加減にしてよ」

「嫌なら出てけよ」

「追い出すな。噛むよ？」

「おうおう、やってみろ。それこそ家から追い出してやるから」
なぜか夢の中ではこの犬は喋る。

「それで今日はどの化け物なの？」

「大量に食べさせられている夢だつてさ。それで本人は少しやつ
れて食欲不振だ」

「実際に夢を見てみないとわからないわけね」

「そういうこと」

夢の中ではフォンスは会話ができるが、容姿は垂れ耳につぶらな瞳の普通のダックスの
ままだである。

「それで匂いはするかい？」

フォンスはクンクンと鼻を上下に微妙に動かし、匂いを嗅いでいる。

「お前の1週間洗っていない匂いを嗅ぐんじゃないぞ？」

俺の余計なひとことを無視してフォンスはチラリと睨み、先へ行こうとする。

「こっちに変な臭いがあるな。ついてきて」

気がつくとできていた森の中の一本道をフォンスの後を追って走っていく。走るにつれ

段々と甘い香りが辺りを包んでいくのがわかる。

やがて、森の中に童話の世界でしか見たことがないお菓子の家が現れた。

「あれか？」

フォンスに尋ねた。

「あそこから怪物と人の匂いがする」

「そうか、さすが鼻だけはいいな」

「人の何倍も嗅覚がいいからね。まかせてよ」

フォンスは褒められてうれしそうな顔をした。

「お前は犬の中でも特に頭が悪くても鼻だけはいいいからな」

わざと付け加えた余計なひと言にフォンスは上機嫌な気持ちは一瞬で終わった。

「今すぐ現実に帰って口におしっこをひっかけるよ」

「それだけはやめろ。二階の窓から放り投げるぞ」

フォンスと無駄口をたたきあっている間にも俺は、薄い飴細工でできた透明に近い窓から中の様子を窺った。

その家の中にはテーブル前の華奢で同年ぐらいの女子と五重ア

ゴの巨大な怪物が鎮座

していた。怪物に何かを脅されているみたいだった。

「あれか。確かにあれは思い出したら怖くて震えるな」

「ワシ見れないんだけど……」

足元でフォンスは話しかけてくる。

「そうか、あんな化け物をお前は見たいのか。それなら見せてやるう」

恐怖で固まるフォンスの顔を見たさに抱っこして見せてあげた。フォンスを降ろし、窓の下に隠れてもう少し様子をみるのか考えていた。

「アレはないね。何か、コツチみて笑顔で手を振ってたし」

「だろ？ あれは怖い。思い出して身震いもするわ」

普通に二人で会話を続けそうになった。

「そういえば、お前さつき手を振られたとか言ってたか？」

何気ない一言に気づき俺はフォンスを凝視して聞いた。

「うん。目が合って、ニコニコって笑って手を振ってたんだよ。

本人は全く気付いてな

いんだろうけど、かなり不気味だったよ」

フォンスはなんのためらいもなく、言い放った。

「バレてんじゃないかよ。このバカ犬！」

少しだけ焦った。

「え？ そうなの？ でも、広界が勝手に見せたんじゃない！」

暗に見たいとせがんだフォンスだが、自分から見たいとは一言も言っていないのを盾に

互いに責任のなすりつけ合いになっていく。

「お前が見てバレたんだから何とかしろよ！」

フォンスと二人で敵の近くで、言い争ってるうちに怪物が扉を開け外に飛び出し、ノツ

シノツシとゆつくりと歩いてくる。

「始めまして。わたくし食欲にまみれた人食いのピグモーと言

ます」

気持ち悪い顔をしているが、礼儀は正しいようだ。

「牛の角にブタのような顔、背中は牛で前は豚か。豚と牛の混合種か？」

「よくわかりましたね」

「その見かけでわからない方がおかしい」

「何でわかったの？　ねえ何でわかったの？」

二回繰り返した時点でフォンスの口に手を当てて静かにしてなさいと、黙ってもらった。

「それで人を太らせて食べようって話か」

「そうです。いつも我々は人に食べられる側ですから、夢の中ぐらい良いんじゃないでしょうか」

「そうだな。夢の中だけならいいかもな」

おや、とピグモーは意外そうな顔をしている。

「珍しいですね、人が共感してくれるなんて」

「そりゃ夢の中だけ済むものならな」

ここで一旦間をおいた。

「ところが、お前がやってることは現実にも影響してるんだわ」
俺はそこまで言うと言を閉じ右手を広げた。

手のひらが白く輝き、光が台風のように渦を巻いて飛び出している。

一瞬まぶしい閃光を放ち、利き腕には肩幅以上の剣が備わっていた。

目をゆっくり開きピグモーを見据えた。

「というわけで、悪いけどここで消えてもらおう」

「お前は何者だ」

ピグモーが得体の知れない化け物を見たように怯えた顔になったのがわかる。

「コイツの知り合いで、たまたま夢に出てきただけではないな？」

今日はバツチり決まりそうだな思いニヤリと笑う。

「そうだ。俺は想断士だ。そうだし人の想いがこもった夢が現実に現れないように消させてさせてもらう」

ここで一息ついて、両手で剣をかまえた。

「お前の想い断ち切らせてもらう！」

勢いよく飛び出し、ピグモーの脇を一瞬で駆け抜ける。

勝負は一秒もかからなかったはずである。

動きが鈍い相手はこの動きについてこれないからだ。

だが、違和感があった。当たった感触はあっても切った感覚がないのだ。

「いやー、君は早いね」

ピグモーはそこまでいうと手で切られた後をスリスリと撫でていた。

「でもね、それじゃ私は切れないわよ」

俺が振り返るとピグモーは平然とした顔で立っていた。

「私はメスだからオスより脂肪が厚いのよ。それで恥ずかしい話なんだけどね、厚すぎ

てお肉が固まっちゃったのよ」

オカマのような口調で笑いながら話しピグモーはこっちを向く。

「残念だったわね。でも私をちよつとビックリさせただけでも褒めてあげないと」

ピグモーは相変わらず気持ち悪い顔で不敵な笑みを浮かべていた。

片手には巨大なトゲ

トゲが付いた金属バットのようだが、先端部分になるに連れて段々と太くなっている棍棒

を持っていた。

「剣で切っても効かないうえに鬼みたいな棍棒まで持ってやがんのかよ……」

側に来ていたフォンスに話しかけた。

「どうするの？」

「とりあえず、どれぐらいの力があるのか見極めないと。見かけだおしってこともあるし」

そう話している間にも棍棒を持ってピグモーが襲いかかってきた。あまりの迫力に受け止めるのをやめ、俺は持ち前の反射神経の良さでとつさに躲^{かわ}した。

大地を揺らす大きな破裂音ともにさっきまで立っていた地面が無残に抉^{えぐ}れている。

「おいおい、やべえな」

背中が冷やり涼しくなるの感じ顔が引きつっているのが自分自身でもわかる。

「避けちゃったけど、どうするの？」

「とりあえず、彼女を連れてフォンスは逃げるんだ。ここにいるも邪魔になるだけだ。

俺はアイツの足を止める」

「わかった」

俺たちは二手に別れた。

「こつちだ、豚骨豚野郎！」

「あんた、どっちも豚じゃない」

「う、う、うるせー。かかってこいオカマ女！」

「あなた挑発が苦手でしょ？」

面倒な事には関わりたくないから喧嘩をふっかけないことをピグモーに簡単に見抜かれてしまった。

「まあいいわ。あのちょこまか動くちっちゃい犬は最後ね」

ピグモーは逃げるフォンスと少女を一瞥してからこちらの方へ顔を向けた。

「先にこつちにいる坊やをやっちゃおうかしら」

ピグモーが話している間にも俺はせこく一太刀浴びせたが全く効

果がなかった。

「何で聞かないだ。脂肪が厚いからか。じゃあどこなら効くんだ」
自問自答する。

その間にもピグモーは俺を目がけてどんどん棍棒で叩きつけてくる。

立っていた地面がボツボツになるという恐怖を味わいながらも必死に避けていく。

だが、ピグモーはどんどん迫ってくる。とうとうお菓子家の壁を背にするまでに追い込まれてしまった。

「さあ坊ちゃんここまでよ。ムフ」

俺は必死にピグモーの目を凝視し冷静に考えた。

ピグモーが腕をあげ、もうすぐ振り下ろしてくる。

俺はそのときなぜか昔、農場に手伝いに行っていたときのことを思い出していた。忘れないあの夏のことだ。

その瞬間、自分の頭にある出来事が想い浮かんできた。

天高く雷が落ちてきたような錯覚とともにひらめきがおこった。

俺はその錯覚に導かれ行動した。

ピグモーが叩きつけた棍棒を両手で剣の両端を持ち一瞬だけ受け止めた。

その瞬間、隕石が落下したような低い重低音が聞こえてきた。

そのまま一瞬の間に右手を下に引き左腕をあげ、体を右へねじり棍棒を右へ受け流す。

受け流した後左手を剣から離し右手を横腹まで引いて、そのまま地面にめり込んでいく。太い鉄の鈍器の真横を通り、利き腕に飛び乗り素早く移動する。顔の近くまで行き、体をややねじり力を溜めてから腕を一気に伸ばし、ピグモーの眉間に

に剣を突き刺し、貫くほど深くめり込ませる。

「うがああああ」

ピグモーは目を見開き真っ赤にしながら野太い声で叫んだ。
やはり急所だったらしい。

「お前は牛と豚の混合種だろ？ それなら現実の世界で出荷する
ときに眉間に打たれる

ものを考えてみる。眉間を鉄のプレートで覆っておけばよかったもの
のを……」

ピグモーが倒れて消えるのを眺めていた。

「おーい、出てこーい。終わったぞ」

フォンスを呼んだ。

「よく倒せたね」

さっきの女を連れてフォンスがこっちにやってきて喋った。

「家畜の悲しい現実だよ。生きとし生けるものにもっと感謝しない
とな」

「どういう意味？」

「生きているすべてのものに感謝しないといけないって意味だ。

家畜でも人が食べるた

め、実験動物であつても利用するために殺されるんだから、その命
は無駄にしたらいけな

いって思つたのさ。もちろん、お前みたいなペットであつても大切
にしないと。ただ、

それをほとんどの人は忘れているのさ」

俺は悲しい気持ちになる。なぜなら、眉間にたった一撃で生きて
いる事実が終わるんだ

と表しているからだ。

対照的にフォンスは自分みたいなペットであつても、大切にしてい
てもらえるという後半の

部分以外は理解できていなかったたので、喜んでいた。

しばらくし、ここに来てからずっと黙っていた女性の声を初めて
耳にした。

「ありがとうございました。私、藤咲花桜梨かおりといいます。花、桜、梨かおりでかおりと言います」

丁寧ていねいに頭をさげ、自己紹介と感謝の言葉を述べたが、ここが夢の世界であることに気づいてないらしい。

「俺は竜崎広界。広い世界の両端を取って広界だ」

「僕はフォンス」

そういうと、フォンスは頭を撫でてもらって嬉しそうにしていた。

「犬とお話ができるなんて、夢みたい」

藤咲は急にメルヘンなことを言い始めた。

「そりゃ、夢の世界だからな」

俺は当然のように答えた。

「普段は普通のダックスなんだけど、広界と一緒に寝ると夢の世界へ広界を連れてくれるんだ。それで話せるんだよ」

そこまで聞くと藤咲は「そういえば」という顔をした。

「どこかでお会いしたような気がするのですが……」

首を傾げながら訪ねてきた。

「一回バイト先の相談屋にきましたからね。最近、食欲がわからないとか言って」

「あー、あの時の……」

藤咲はまたお辞儀をしたが、まだそれだけで納得してないようであつた。

「たぶん、別の場所でもあったことがあるような……」

藤咲は思い出せない記憶を必死に思いだそうとしている。

「ところでフォンス。アレを出せ。夢から覚める前に」

「わかったよ。はい。」

フォンスの首にかけられた布から爆竹みたいのを取り出した。

「何ですか？ それ」

藤咲は当然の疑問をぶつけてきた。

「これは記憶を消す、爆竹みたいなもん」

「何で消すんですか？ 嫌です。ちゃんと会ってお礼したいです」

「それはできないんだ。俺たちは夢で会えた人とは、夢の記憶を持つたまま現実の世界

で会うことはできないんだ。たとえ、美人さんでも超VIPな人であつてもね」

俺はそう言うとういんクをした。

他人から見るとギザでかつこつけているだけにしかみえないが、

俺の中ではかつこいい

キメのポーズのようなものだと思っている。

俺は手に持った爆竹に火をつけようとする。

火をつければ、パンっという音と共に記憶がなくなるハズである。だが、その前に体が薄くなつていくのを感じた。

「おいおい、マジかよ」

俺は焦るが、どんどん薄くなつていくのは変わらなかった。

3

竜崎は布団の上で目が覚めた。

「ヤベー。記憶を消す前に目が覚めたか……」

騒いでもしょうがないので、彼は布団から出る。

掛け布団の上にはフォンスが大股広げて、股間を見せびらかすように仰向けで眠っているのが竜崎の目に入った。

「起きろ、バカ犬。散歩行くぞ」

フォンスはパツと目を覚まし、着替えた竜崎に散歩へ連れて行かれた。今日は良く歩く

日だったらしく、一日を占う意味でも快調な滑り出しである。

散歩を終えた竜崎は朝食を食べ、いつも通りに高校に登校した。

「相変わらず、眠そうだな」

教室につき、登校途中で会ったカトケンと話していた。

「昨日は話を聞いていて、特に疲れたから」

竜崎は加藤に相談屋以外の話は何も伝えていない。

「それよりも、たんなる寝疲れだろ^{ねづか}」

「まあな。そういうことにしとくよ」

竜崎達は教室で中身のない会話を続けた。

そこへ2年の教室のドアの前に立っているスカートを履いた女子が誰かを呼んでいるよう気がした。

「あーゆう美人って俺たちとは住んでる世界が違うよな」

加藤はそういった。

足も細く徐々にな上へ見て行くと、スベスベしていそうな白い肌に綺麗なソックス。スカー

トもシワになっていない。そのまま何も胸元を通り過ぎ、首元を眺めるとそのまま

顔の位置まで視線が動いた。

顔を見ると竜崎は飲んでいた紙パックをむせて嘔き出しそうになる。

「おい。広界くんこの子が呼んでるよー」

クラス的女子が竜崎へ呼びかけている。

彼女は満面の笑みで手を振っていた。

竜崎は掃除用具いれの中に慌てて隠れようとしたが、無駄だった。

「見られてから隠れるアホがコウちゃん以外にどこにいたんだよ」

「やつぱり？」

竜崎は諦めて彼女のもとへ歩いて行つた。

自分の妹のもとへ。

「家でなるべく教室に来ないでメールをしてくれって言ったよな」
「うん。でもお兄ちゃんにどうしても言いたいことがあって」

妹の奈緒は心配するような顔で言ってきた。

「なんだい？」

竜崎は心配してくれる妹に用件を言うように促した。

「最近、下駄箱にイタズラされるようなヒドイことした？」

竜崎はキョトンし、目が点になった。

「お兄ちゃん、黙ってないで答えてよ！」

彼には自分の妹がなぜ怒っているのか理解ができなかった。

竜崎は首を傾げるほど、そのようなことをした記憶がなかった。

「いや、知らないな。カトケンならやりそうだけどさ」

竜崎はチラッと座っている加藤を見ると話が聞こえたのか、右の口角を少しあげ中指を

たててこちらを眺めている。

「それで、どんなやつだったんだ？」

奈緒へ視線を戻し、話を続けた。

「すつごく綺麗な人」

なぜかこの一個下の女子は綺麗な人を強調していた。

「だからお兄ちゃんが、きっと何かヒドイことかをした思ったのよ」

「何でイタズラだと思ってんだ。ラブレターかもしれないだろ！？」

竜崎は希望を捨てないように必死に訴えた。

「そんなわけないじゃん。バカ」

妹に最後の望みまで一言で絶たれ、うなだれる竜崎。

「とりあえず、下駄箱に行ってみなよ。いいね！」

「わかった昼休みに行ってくる」

妹と別れ、教室に戻っていく竜崎。

「おい、俺の妹じゃねーか」

加藤に八つ当たりする竜崎。

「誰も妹じゃないとは言っていないぜ」

美人という言葉聞いて想像して、少し現実が見えなくなってい

ただ。

それに加藤の言うことが尤もだったので言い返せない。

「それに何で僕が女に嫌がらせをすると思っただんだい？」

加藤は聞いてきていたが、そのままそんな印象だからとはいえず、竜崎はごまかす言葉

も見つからないため、聞き流すことにした。

担任が教師に入り、出席を取り終えると、彼はそのまま寝てしまった。

待ちに待った昼休みになり、お昼ご飯を食べずに彼は下駄箱へ直行した。

そしてそのまま自分の下駄箱へ行き、扉を開いた。

そこには、なんの変哲のない手紙が一通置いてあった。

「おい、まさか富鉦の手紙じゃないだろうな」

一緒について来た加藤が聞いた。

「これが金のなる木とか金が出る鉦山のように見えるか？ きっとまさしく不幸の手紙だよ」

竜崎はそういうと手紙をあけた。

見た瞬間、彼は果てしなく後悔した。

本当に不幸の手紙であった。フラグを立てて回避しようとした彼の作戦は崩れ去った。

「それでどんな手紙だったんだ？」

後ろで見ていた加藤が人の不幸を期待するような笑みを浮かべて聞いてきた。

「ふ、ふ、不幸の手紙……」

竜崎は真つ暗な気持ちで5文字の言葉を口にした。

そのまま涙目を浮かべ、加藤の方を向いた。

「お、おう、そうか。俺には関係ないからみせるなよ。絶対だからな」

加藤が顔を引きつらせて後ずさりして離れていく。

夏休みと勇気だけが友達さ

第二章 夏休みと勇気だけが友達さ

1

その不幸の手紙を受け取った竜崎は数年前のことを思いだしていた。

当時、中学生の竜崎は一人の不思議なおじさんと出会うことになった。

親の知り合いの牧場で二週間牧場体験をする予定で夏の北海道の山奥に来ていた。その

生活の途中で彼は息抜きとして、たまたま札幌という北の大地でも栄えた場所にきていた。

だが、その帰り道では息を抜くどころか彼の心は真夏なのに雪雲で覆われ真っ暗のままであった。

数時間前、彼は牧場の人とは離れ、一人で地下鉄駅のホームに立っていた。ローカル番

組から大ヒットした番組のショップに寄った後、最後尾の車両に乗るためにプラットフォーム

ムの端で電車の到着を待っていた。先が暗く見えないトンネルから列車の先端が目につ

り、彼は床に何気なく置いてあったカバンを手にした。

その時の彼は横にいた暗い顔をした同い年ぐらいの女性に声をかけようか迷っていた。

彼女に気があるわけではないが、なぜか竜崎はなるべく早めに声をかけなくてはならない

気になっていた。

結局、心に何かが残るも話しかける勇気がないのでやめてしまい、彼がどうしようか悩

んでいるうちにも列車が早い速度でホームに入ってきた。

竜崎が隣にいる女の人をチラリと横目で見てみると高速で走ってくる鉄の塊に無防備な

恰好で飛び込んでいってしまう。

「危ない！」

彼が叫んだ時にはもう手遅れであり、反射的に目を瞑り目の前を真っ暗にしても何が起

きているのかは明白であった。周りで目撃した人は少ないが、見た者に衝撃とトラウマを

与えるには充分すぎる内容であった。竜崎は自分が声をかけておけばふせげたかもしれない

いと、ふと感じてしまった。

だが、あの場で直感を信じて声をかけられる人は皆無である。

「広界君？ 大丈夫？」

牧場に戻り、父親の知り合いで貝出居かいでい牧場の牧場長が心配して声をかけてくれたが、竜

崎は頷くだけで何も答えられなかった。

「目の前であるの惨事をみたら誰でもショックを受けるわよ」

牧場長の奥さんがそういうと彼を心配そうな顔で見つめている。

彼が何も話す気にならないのは当然であった。実家にも連絡が行き、明日の昼過ぎに竜

崎の母親が迎えに来る。

まだ小さく引き取りてのいなく、竜崎家に引き取られることになったミチュアダックス

も心配そうに見てきたが、言葉を発せないのも今の竜崎には何を言いたいのかわからなか

った。

結局、そのまま夕食も喉^{のど}を通らず、人工的な光と月の明かりが支配する時間になり、就寝の時間になるも、彼は寝つけそうにないまま布団に入る。

電気も消しあたりが暗闇に包まれると、今まで感じたことのない圧迫感を感じた。そして、

頭の中で血の惨劇が蘇る。竜崎は深く布団をかぶることにし、無理やり目を閉じた。

彼は少しすると、フワフワと浮いて気持ちのいい感覚になってきた。彼は夢を見始めた。

のだ。今日の出来事を忘れ、夢の中で足元で寝ているはずのダックスと遊んでいたが、犬が急に尻尾を巻き怯えだした。

怯えだした先を見ると列車の下敷きになってしまった女性の姿があった。

彼は言葉で言い表せない悲鳴をあげたが、誰にも届くはずはない。「なぜ声をかけてくれなかったの？　なぜ誰も私を止めてくれなかったの？」

普通の人が聞かれたら、自分は関係ないのに巻き込まれたんだと言えるが、竜崎には心を見透かされているような気がして何もいえなかった。

竜崎の心の迷いを見透かすように彼女は迫ってきた。

「声をかけようとしたんだ、心配だったから。でも……」

彼は事故直後に感じていた心では思っていたことを素直に口から出した。

「でも実際には飛び出してからしか声をかけてくれなかったじゃない。絶対に許さない。」

絶対に……。地獄の底まで呪ってやる……」

彼女はそこまで言うと言と薄気味が悪い笑い顔になっていく。

自分に相手の心へ一歩だけでも踏み込む勇気が持てなかったため

に、彼女がこうなっ

しまったことを改めて広界は後悔した。

「どうすれば許してもらえるの？」

竜崎は死んでしまった彼女へ聞いた。

「一生話し相手になってもらうわ。あなたが死ぬまでね……」

うなだれていた竜崎へ彼女は見つめていた。

それを聞いて背筋が寒くなり、まるで白装飾を着ている彼女に暗闇が広がる底なしの深

い井戸の中へ引きずりこまれそんな気分になった。

そこで彼は体が薄くなっていくのを感じた。

それはまるで温かく解放された気持ちになっていった。

竜崎は朝をむかえシーツが汗臭く湿っているのがわかった。

「広界くん。今日、警察に行くんだよ。支度して」

牧場長の奥さんが目覚めを待っていたのかのように声をかけた。

「わかりました。食欲がないのでそのまま行きます」

竜崎はサッサと支度をすませ、警察へ話の続きをしに行った。彼は未成年であることと、

親が東京にいることからその日の聴取は軽くしか行われていなかったのだ。

警察でどんな状況だったのかなどを話し、その日の午前中には何もかも終わった。彼は

牧場長がうまいものを買ってきてやるから待っていると云うので公園のベンチに座って待つ。

ボンヤリと昨日の光景と夢を思い出すと恐ろしくなっていく。それに起床してからずっ

と後ろから見られている感じもしていた。彼がそんなことを思いながら座っていると、隣

に座りこんだ変なおじさんが声をかけてきた。容姿からすると明ら

かに北海道の人ではないの

のかわかる。

「どうしたんだい。何か浮かない顔してるけど？」

「おじさんには関係がないです」

記者とかに何を聞かれても答えるなと警察から言われていたので答える気は全くなかつ

たが、竜崎にかまうことなくそのおじさんは自己紹介を始めた。

「俺は東京で占い師のようなことをやっている、柳林。やなまやし君は？」

いかにもうさんくさい職業であるけど、自己紹介をされたのなら自分もしないと失礼に

あたると思い、仕方なく竜崎も応じた。

「竜崎広界。見た目でわかると思うけど、学生」

竜崎はそう名乗った。

「君は学生じゃないだろ？」

少年は何を言われたのか全くわからなかったので固まってしまった。

「君は大学生じゃないだろ？ それなら君は学生ではない。生徒だ」

前に友人と話していたことを思いだした。

「あ、そうでしたね。大雑把な見かけによらず、細かいこと言ってきますね」

竜崎は思わず会話に乗ってしまった。

一度会話になると、口止めされていた昨日の事件のことと夢の中のできごとと、誰もい

ないのに後ろから付けられているような気がすることも話してしまった。それでも柳林は

変な目で見なかったために竜崎は気持ち良く話せた。

柳林はなぜか夢の話を目に聞いていた。

「君はそれ以来なぜか後ろから見られてる感覚があるんだね？」

「はい。ちよっと薄気味わるくて……」

「んー、考え過ぎだよ。今日は家に帰ってゆっくり休みなさい」
柳林はそういうと、イスから立ち上がりどこかへ歩いていった。
柳林と話すと竜崎はなぜか心がスツキリした。
そこへタイミングよく、牧場長の貝出居が戻ってきた。
「良い店を見つけたから行こう。食べなきゃ体に良くない」
「おいしい食べ物を買ってきてくれるんじゃないかなかったですか？」
「ここで食べるより、できたてのものを食べた方がウマイからさ」
早くそこに気づいてほしかったなと思うが、貝出居のささやかな心遣いに竜崎は感謝した。

「良い店って何のお店ですか？」

「味噌ラーメン。好きだろう？」

「はい。大好きです！」

笑顔で返事をし、そのまま二人でラーメンを食べに行った。

二人は食べ終え、空港へ車で行くと母親が待っていたので合流しそのまま東京へ帰った。

貝出居が空港で竜崎へ大変な目に会わせたと母親に頭を下げていた。
竜崎は帰宅途中あの事故のことは父親にもまだ小さかった妹にも何も聞かれず、そのまま就寝前の時間になった。

2

「いらつしゃーい」

彼女はニタニタと不気味な笑みを浮かべていた。

俺は視線を合わさないように決めると挨拶する前に提案をした。

「とりあえず、呼び名を決めたいんだけど」

「そうね。私は」

「きみ、貞世ね」

相手が呼び名を名乗る前に決めてしまうことは、会話作りには意外と有効であるのだ。

彼女は手を震わせて怒りはじめた

「じゃあアナタは皮越芋太郎ね。地獄の底まで付きあってもらうから」

「その名前は色々ダメな気がする。ミサキにしてくれ」

貞世は視線を合わせようとしない俺をじっと見つめている気がした。

その場の雰囲気になえきれず俺は言葉をかける。

「それで今日はどんな話をするんだい？」

「そういえば、今日は犬が一緒じゃないのね」

「あれはウチの犬じゃないから」

何である犬と一緒にいると思ったのだろうかと思っただが、その前に聞くべきことを聞くことにした。

「なぜか、貞世と夢の中で一緒に話してから一日中、ずっと後ろから何かに見られてる

気がするんだけど……。何か知らないかな？」

一日過ごして感じたことを素直に聞いた。

「えー。見てたわよ。ずっとね……」

俺は彼女に見つめられて背中に氷を入れられたように背筋が冷たくなると同時に顔が

段々と青くなっていくのがわかる。血の気が引く感じとはこういう

ことをいうのかと初めて

知った日でもあった。

しばらくの間、沈黙の時間が流れた。

彼女のジーと見つめてくるが、俺はいまだに視線をそらす。その

まま合わせると死線を

越えてしまうような気がしていた。

このまま朝を迎えたらどうなるのだろうか、と感じていたが、後

ろで足音がしたので俺は振り向いた。

「やあ少年」

なぜかそこには昼間に会った柳林が手を振りながら立っていた。

「これが昼間に話したっていう人？」

「うん、そうだよ。生霊みたいのに付け回されているみたいなんだ」

柳林は胸ポケットに入っているハムスターとしゃべっていた。

「ところで竜崎君。昼間に話していた夢に出てきたっていう小さい犬は？」

「えっと、あの犬はウチの犬じゃないので。もらう約束はしたんですけど……」

「そうかそれなら良かった。大事にしろよ」

「ところでどうしてハムスターが話しているんですか？」

当然の疑問を聞いた。

「ん？ それは夢だからだよ」

「そうなんですか。それだけの説明で納得させられるとおじさんを変な人扱いしないといけなくなりますよ」

「君と一緒にいた犬も話せたんじゃないの？」

「いや、話してませんけど」

俺は犬が話せるわけがないと思っていたから聞いた質問に首を傾げた。

「まだ小さいからかな。ま、その犬が君と暮らすならそれでいいや」

当時の俺では言っている意味がわからなかった。

「とりあえず、あの白装束で井戸の中から出そうなのは君の心が作った怪物だから、君

自身でどうにかしないとダメだから」

「そうなんですか？」

「うん、そうそう。君とは話したいだけみたいだし、こうして存在を無視して会話をし

ても何もしてこないしね」

ただ、と柳林は付け足した。

「僕には襲ってくるだろうね」

それを聞いて柳林の顔へあらためて向きなおした。

あいかわらず何も話さず、ずっと見つめてくる彼女。

俺は何をすればいいのか彼に聞くことにした。

「それである悪霊みたいのを追い払うには何をやればいいんですか？」

「私は悪良アクラですかそうですか」

ウッフと彼女は薄ら笑いを浮かべ、自己の中で存在を良いのか悪いのか価値をあいまい

にしてどこかへ歩いて行ってしまった。

柳林は貞世が消えたのを確認してから言ってくる。

「君、早めに倒さないと明日からずっと悪夢に出てくるよ」

自分が原因とはいえ、それは勘弁してほしかった。

「どういう意味ですか？」

「彼女は成仏じやうぶつみたいのができずに困っているんだ」

柳林はとても曖昧な表現で話し始めた。

「みたいのって何ですか？」

「君が自分に勇気がなかったと後悔したせいで、夢の中に人格がめちやくちやなまま金

に出現せられてしまったんだ。それで彼女の存在を消すために君が成仏させないといけな
いんだ」

俺は彼女が安らかに眠れない原因が自分であつたことがショック
だった。

それから少しの間、俺の耳には柳林の話が入ってなかった。

「聞いているのかい？」

「すみません。聞いてませんでした。彼女に悪いことをしたなと思っ……」

「それだけわかってれば今は充分だ。消すための方法を簡単に説明しておく、君がイメージしたことがここでは実現できるからそれで彼女を倒す。実際に手にしたものや体験したものの方がイメージしやすいだろ？」

「はいそうですね。触った感じ、体験して肌で感じたことの方が、頭の中だけで考えたものより、実感がわきます」

「じゃあためしに少しやってみよう」

柳林の簡単なレクチャーが始まった。

俺は本やアニメ、映画でしか見たことがない魔法使いになったみたいで少しドキドキしていた。

「まず、好きな女の子とのキスした時のことを想像してみよう」

「はい」

俺は真剣に想像したが、中学生である自分には思い浮かぶわけもなく、ギブアップをした。

「あ、君まだ生徒だったね。しかも中学」

柳林は少しニヤついていたが、俺は真剣になっていたので、なぜニヤついているのか想像

像がつかなかった。後日、改めて思い返した際に俺は柳林の玉を思いつき蹴っ飛ばしておけば良かったと思った。

「とりあえず、これで何も知らないことを想像することが難しいのはわかったね。次に体験したと思えることは……」

柳林は次に何かを考えていた。

「最近、自転車で家の近くのとて長い坂を一気に下ったことがあります。その体験ではダメでしょうか？」

「じゃあ、それでいいからやってみようか」

あえておじさんへ返事をせず、目を瞑りイメージを始め、坂を一気に下っていた時のことを思いだす。

坂は急になっており、脇道もないのでいつも人が飛び出してくる心配もなくドンドンスピードを上げていける。ガードレールのすぐ横をやさしい追い風を引き連れさらに速度を上げていく。そのうちに突風も背中から押してくれるような感覚になった。

段々、自分の背中へ実際に風が流れている感覚になっていくのがわかる。

髪が風に流され、たまたま着ていたパジャマも音をたてていた。

「よし、OKだ」

柳林の声を聞きそこで目をあけた。

自分自身の姿を見ると、髪がボサボサになって、少し腕や足などの体が冷えていることに気が付いた。

「これが自分の想像の力……」

「そうだ。今度はそれを簡単なイメージに変えてやってみるんだ。後ろから風に押され

て一気に牛が突進するように想像して走りぬけるんだ。つまり、想像することと走るこ

二つを同時に行うんだぞ」

「やってみます」

さっきと同じ想像し少し走って見たが、普通にランニングしているのと同じだった。

「一緒にやるのは難しいですね」

「最初は誰でもそうだ。コツをつかむまでやってみろ」

俺は集中した。それでも集中力はある方だと思っている。

「さっきの感覚を思い出せ。後ろから風に背中を押され、体全体で感じた風を」

俺はブツブツつぶやくと、まず一步を踏み出した。次にもう一步。次の次に踏み出した

足がベルトコンベアのように前へ戻ってきた。次々とそれを繰り返していった。

風を受けて走ってる感覚になり、ふと目を開けるとそこには誰もいなかった。

「柳林さーん」

声をかけても誰も見当たらない。

そして元の場所に戻ろうとし、今度は目をあけて風の感覚を思い出し走り出す。

すると、やっと柳林の姿が見えたと思うと、すぐに真横にまできていた。

「それだよそれ。想像して感覚として掴むことが大事だったんだ」
柳林は俺を褒めたが、俺は別のところに関心があつた。

「想像で何かが変わるってことは服も変えられるんだよね？」

「そうだけど、どうしたんだ？」

俺は憧れの着たい服をイメージした。

「やるなあ少年よ」

「前からゲームの戦士のキャラの衣装に憧れたんです」

俺は少し照れながら頭をかいた。

「君は呑み込みが想像以上にはや……」

柳林はそこまで言うつと、苦痛な顔を浮かべて腹から飛び出していい包丁で血を流しているのが目に入る。

俺はとっさのことで事態が呑み込めなかった。

「何で余計なことをするのよ……」

柳林が倒れると後ろから不気味な声がした。

「アナタ ハ ワタシ カラ ハナレラレナレ ノ ヨ ウフフ
フ」

貞世は返り血を浴びた白装飾を見に纏い、満面の笑みを浮かべていた。

「ジャマモノ ハイナクナッタ」

「おい、なんでだよ！ 何でこのおじさんが死ななきゃならないんだよ」

俺は体が恐怖で震えながらも必死で問いかけた。

「邪魔する方が悪いのよ。アナタは私とずっと一緒にいるのよ」

不気味な雰囲気の声から元には戻ったが、恐怖は終わらなかった。

「ねえ、約束したでしょ。あなたが死ぬまで一緒にいるって。私はアナタがいるからここ

こにいるの。アナタが消えれば私も消える。だけど、私だけ消えることもできるのよ」

彼女は自分の首に包丁を向けていた。

「やめろ！」

二度目はもう見たくなかった。

「ものわかりがいいじゃない。やめてあげるからずっとお話ししましょう」

俺は柳林の方を見つめた。

「君が貞子を解放するんだ」

意識が混沌としているのか柳林は彼女の名前を間違えている。

「君が作りだしたんだ。君が勇気と責任をもって倒さないとダメだ……」

俺は悩んだが、彼女を生んでしまったことを素直に謝り、永遠に安らかに眠りについてもらうことにした。

「ごめん、声をかける勇気がなくて」

竜崎はとても誠実に目を見つめて伝えた。

「君を作ったのは僕だ。君の墓参りにもちゃんと行く。君がもうこれ以上淋しい思いを

しないように墓に話しかける。だから……」

そこまですうと彼女の目に涙が浮かんでいるのがはっきりと見え、俺はさらに自責の念

が強くなるが今度は自分自身で決着をつけなければならない。

「だから、君を倒す。顔は傷つくと嫌だろうから、お腹のみぞおちに苦しめないように

一発で決めさせてもらう」

俺はそこまで言うと、さっきの要領で勢いよく突進し、アップパーをいれた。

彼女の体が九の字に曲がり、何かつぶやいていた。

「あ、り、が、と、う。」

彼女を自殺に追い込んだのが何なのかわからないが、とても悲しい思いになった。

「あ、終わった？」

そこには何事もないように柳林が立っていた。

「はい、終わりました」

俺はあまりにも理解に苦しむことに遭遇し、普通の返事をしてしまった。

それから30秒ぐらいたたただろうか。

「何で生きてんの！ あんた刺されたる！？」

やっと聞くべき質問にたどり着いた。

「うん。でもこれは夢の中のお話だよ？」

「夢の世界でも限度があるでしょ」

俺は呆れて言葉を返した。

「ほら、現実の世界で前に刺されて死にかけたし、だからよっぽどのがないと夢の世界じゃ死ねないんだよね」

柳林はそんなことを笑いながら話していた。

「なつとくできるか、ボケ」

俺はまともなりアクションをしたつもりでいたが、柳林には受け入れてもらえなかった。

そして柳林は地面に落ちていた石を拾い上げ、思索している顔していた。

その石を見てなぜ考え込むのかわからなかったから聞くことにした。

「なんですか、その石みたいなのやつ？」

柳林は俺のその質問には何も答えず、どこかへさつさと帰ろうとする。

「お、そろそろ朝になるな。僕はこれで消えるから、僕の店に一度おいでよ。良い物あげるから」

そこまで言うのと、柳林は少し黙り段々と透けていく不思議な現象になっていった。

「とりあえず、店の名前はまだいいや。君の家に直に送るからよろしく」

「直って家の住所とか言っていないんですけど……」

柳林に歩みかけたが、もう見える状態ではないほどに薄くなっていく。

「あと、このことは話したらダメだぞ。変な人にしか思われないからね」

柳林は最後に右手の指をパチンと鳴らし、口外をしないように口止めをしていった。

俺にはとうとう見えにみえないほどに消えてしまう。こんな夢をいままでみたことなか

ったから奇妙な夢だという程度にしか考えられなかった。

竜崎は目を覚ますと、なぜかすっきりした気分になった。もう誰にも見られている感覚はない。

ただの夢の中だけど、RPGに出てくるような勇者の服もきれたし、自分自身に踏ん切りもついたり大満足であった。

ただ、他人に話すなという言葉が気にはなったが、別に誰かに話すつもりもない。たまにつける日記に書くぐらいである。さっそく忘れないうちに夢の出来事を日記に書き始めた。

「ごはんよー」

ちようど書き終えた頃に下から母が呼ぶ声がした。下に降りて行くと母親が心配そうな顔をしていた。

「何、心配そうな顔してんの？」

「いや、昨日はうなされたって聞いたから、心配してたのよ」

「あ、もう大丈夫。ケリをつけてきたから」

彼はそういつと笑顔を作った。

竜崎の母はケリの意味を聞いたがっていたが彼は話すつもりがなかった。

数日経つと竜崎宛てに郵便物が届いていた。

差出人に柳林盛夫と記してあり、手紙と一緒になぜかまだ家に来ていない犬の首輪も付いてきた。

そして手紙の内容にはこう書いてあった。

『夢のことは誰にも話してないね。たぶん、あれ以来あの感じの夢も見えていないと思う』

けどね。とりあえず、そこにある夢封じの首輪は犬に使ってくれ。その首輪をしてないで

一緒に眠ると、また変な夢を見ると思うから。

あと、ペットを粗末に扱っちゃダメだぞ。愛情を持って育てるんだ。

そうすれば、きっと大きく成長しても、かわいく思えるから。

そして、色々な体験や経験をしなさい。すればするだけ、君の力になる。

P・S・ この前一緒に見た夢の話が風の噂や都市伝説のたぐいで万が一にも僕の耳に入

ったら、君の好きな人と恥ずかしい秘密を近所や通っている中学校、それにこれから進学

するであろう高校も含めた君に関係するすべての人にバラします。

こうして手紙を送っているのだから、君のことや住所を知っているのはわかるよね。僕

からは絶対に逃げられませんよ。』

手紙を見ると竜崎は体が震え出し、夢の中で感じたようにまた顔が真っ青になっていく。

まるで夢の中で出会った貞世より怖いものをみたような気分になった。世の中にはずっ

と知らない方がいいこともあるのだと実感したが、もう手遅れであった。彼はもう、勇気

と身の危険を感じざるを得ないことへの一步を踏み出してしまったのだ。

月日はめぐり、夢のことを忘れかけていた竜崎は高校に入学していた。

高校に入学してからのある日、彼の通う高校は私立の高校にして

は珍しくバイトが認め

られているので、ボンヤリと求人の広告を見ていた。

その彼の側にはつぶらな瞳の犬がいた。貝出居牧場で引取り手が見つからず、生まれた

時は小さい子犬であったであろう犬は、竜崎家でフオンスと名付けられた。ミニチュアに

してはとても大きく成長したミドルダックスと呼ぶ方が適切なサイズのフオンスと名付け

られた犬と一緒に暮らしていた。そして首には柳林からもらった首輪を付け続けていた。

「未経験者の高校生可。店長が面接をするので、その場で採用もあり！ 誰でもすぐに

高自給！ 明日から君も聞き上手！ そしてサボり放題！」と書かれていても変なキ

ヤッチコピーで募集をしていた、とてもうさんくさいバイト先を見つけた。

竜崎は嘘くさくてもお金になるならいいやと思い早速、締め切りにならないように電話

をし、次の日には面接に行くことになった。うさんくさい謳い文句と同様にうさんくさい

雰囲気を出している店に入る。

そして一室の扉を開けると、そこには面接官として柳林が満面の笑顔で座っていたのを

目撃してした竜崎はあまりのできごと^{きょうがく}に驚愕してしまう。

「待ってたよ。今回というか最近^{きん}は君の家のポストだけにしか入れてないから、君しか

来ないんだけどね」

笑いながら柳林は話しかけてきた。

対する竜崎は数年前にももらったあの手紙を思い出し、ゾツとした。「君はここで働いてもらうから。あの犬のこともそろそろ話さな

いといけないしね」

柳林はなぜかもう採用が決まっているかのように話し始めた。そして、また家で飼っているあの犬の話もしていた。

「アルバイトは、いくつかの簡単なマニュアルがあるから、慣れるまでそれにしたがって

てくれればいいから。一通り学んだあとはそれからどう対応するか、君の自由だ。頼むよ、

新人君」

そこまで言うと言面接官のおじさんは一呼吸置いた。

「それで質問とかある？」

柳林はそういうと、竜崎に何かあるのか尋ねた。

「ふたつあります」

「どうぞ。答えられる範囲のことなら答えるよ」

「まず、一つ目。家に首輪を送ってきたり、なぜあの犬にこだわるんですか？」

竜崎は数年前も犬の話をされたのでひっかかっていたことを聞いた。

「あー、それはね」

柳林は真剣な顔つきになった。

「あの犬が夢に行くためのチケットみたいなもんだからだよ」

「はあ」

と答えはしたが、一般人の竜崎には当然理解できるはずがなかった。

「まあ簡単に言うと、あの犬は夢のカギを持っているからね」

「チケットも鍵も扉があつたら中に入るのに必要にある同じようなものじゃないですか。

人に渡して入るのが自分で使うかの違いで」

「よく気づいたね。そんなもんだと思ってくれればいいよ。扉の向こうに行くのに必要

な物だつてね」

「とこ」で、なんで俺の話を聞いただけでフォンスが持っている
とわかったんですか？」

「一応確認しに、わざわざ牧場まで行ったんだよ。なぜか引き取
り手がいなかったのも

そのせいだよ。適切な飼い主に巡り合うまで、鍵を持った動物は人
から避けられるんだ。

僕が夢の中ではなしていた、ハムスターの松星まつぼしのマツ君を覚えてい
るだろ？」

「あのハムスター松星スターつて言うんですか」

「うん。松の右に星で松星」

竜崎はまさかの直球の命名にこんな店長の元で働くのが不安にな
つていった。

「マツ君もずっと売れ残っていたんだ。それを私が引き取った」

竜崎はそこまで聞くと、ちょっと不思議に思ったことがあった。

「何で牧場の名前と場所を知っていたんですか？」

「だって、君が言ってたじゃない。東京から来て、貝出居牧場に
来てるつて。名前さえ

わかれば後は簡単だよ」

「じゃあ何でウチの住所もわかったんですか？」

「ん？ それは調べた。僕にかかれば簡単だよ」

柳林は笑いながら答えていたが、竜崎は少し怖くなっていった。

「もう一つ質問いいですか？」

「なんだい？」

次に竜崎は恐る恐るを口にだした。

「バイト採用の辞退権はありますか？」

「ある」

柳林は即答した。

これで竜崎は断ることができるとホッと胸をなでおろした。

「と思ってるの？ 断ってもいいけど、どうなっても知らないぞ」

柳林はなぜか笑顔で答えてきた。

「それにバツクれて逃げたり、サボったらわかるよな？」

そういうと、ドス黒いオーラを見に纏い眼光の奥をひからせていた。

「で、ですよー。頑張って働きます」

竜崎は顔面を引き攣らせながら答えた。

「よろしい」

店長は頷いた。

「ただ、君は高校生だから、テストの時はちゃんと配慮もするし、いい点数を取るコツも教える。悪くないだろ？」

こうして、竜崎はこの店で働くことになった。

紙と文字

第三章　紙と文字

1

不幸の手紙を受け取った竜崎は凹みながら、人との待ち合わせ場所へ向かった。そこはどこにでもあるファミレスである。ごく普通の男子高校生の竜崎なら一度は行くであろう

その場所は日常と特に変わった所はない。

ただし、竜崎を待っている相手がいつもと変わっている。そこに待っていたのは女性で

年下の同じ高校に通う女子である。

「やあ待った？」

「いいえ。私も今来たばかりなんです」

と、言いつつドリンクバーに頼みケーキを食べていた。

そんな彼女を見ながら席に着く。

「とりあえず」

と竜崎はまず先手を打った。

「用件を聞く前に頼みごとがある」

竜崎はすぐに切り出すと、彼女は少しビックリして戸惑っていた。

「夢のことはバラさないでくれ」

竜崎は椅子の上で背筋を伸ばし正座をして深く頭を下げた。すると、勢いのあまり店内

に響き渡るぐらいの音を立てて机に土下座をしてしまった。

「大丈夫ですか？　机にぶつけてドカーンって音がしましたけど」

「この店の机は地雷原ですか？」

彼女はちよつと疲れているのかもしれない。擬音がおかしい。

竜崎はそう思い、さつさと話を終わらせようと思った。

「とりあえず、夢の話は誰にも言わないでくれ。頼む」

「どうしてですか？」

「色々と困るんだよ」

と竜崎はあいまいに答えると、相手は興味深そうな顔をした。

「色々って何ですか？」

「色々は色々だよ。ちよつと答えられないんだ」

そついうと彼女は考え込むような顔になった。

「えゝ、どうしようかな」

向かい合っている相手はアゴに人差し指を当て斜め右を見ている。

竜崎はそのしぐさを見て、くっそかわいいと、思うがこのまま引きずられては困る。

「頼む。バラされたら困ることがバラされるんだよ。あの店の店長に！」

「竜崎さんがバラされたら困ることってなんですか？」

もう一歩踏み込んだ。

「それは言えない」

竜崎は苦し紛れにそう言うしかなかった。

すると彼女はニコつと微笑んだ。

「冗談ですよ。私は初めから言うつもりはありませんよ」

彼女はアハハと笑い始め、彼は啞然として彼女を見つめるしかなかった。

「ただし、条件があります」

そして指を一本立て、竜崎へ提案してきた。

「お姉ちゃんのことを助けてあげてください」

「手紙にも書いてあったけど、お姉ちゃんってどんな人？」

「優しい人ですよ。ただ、最近、悩んでるみたいで……」

「ふーん。それでその本人は？」

「あ、いました」

彼女が指さした先には一人の美人が立っていた。

「お疲れさまでした」

「ちょっと待ちなさいよ」

顔をみた途端に席を立ち帰ろうとした竜崎の腕をグツと掴む、肩まであるストレートヘア

アーの女性がいた。

「何でお前がここにいるんだよ」

竜崎は普段からあまり関わらないようににしていたサラサラヘアの相手へそう聞いた。

「私だつて、知らないわよ。妹が何とかしてくれる人がいるって言うからここに來ただ

けであつて、相手がアンタだつて知つてたらここに着てないわよ」

藤咲^{こし}誇紫はそういうと席に着きドリンクバーを頼んだ。

店員さんが伝票を持つてくるまで、気まずい沈黙の時間が続いた。

竜崎は彼女のことを嫌いではないが、関わりづらい存在であつた。

「藤咲^{こし}つて名前から気づいとけばよかったな」

竜崎は頭をかいて嘆く。藤咲姓がそれほど多くはないことから、

彼女の縁者であること

は推測できたはずである。

俺と誇紫は中学校が同じで高校1年でも同じクラスだつた。始業式の日には男女交互の出

席名簿順に座るとたまたま隣同士だつた。それだけでそれ以上のことは何もない。

基本的に仲が良くなつた人以外には無愛想だつた俺とは違い、誰にでも愛想がよく誰とも仲良くなれる藤咲。

そして皆に好かれようと愛嬌をふりまいていた誇紫を俺は哀れ思うのと同時に少し羨ま

しくもあつた。バイトを始めるまで自分にはそれができなかったか

ら。人によって合う顔

に変え、まるでカメレオンのように周りに適応しながら上手く世渡りをしていく。

藤咲は中学でも初めのうちは、俺とも仲良くしようとはしていた。ただ、俺が好んで仲

を深めようとはしなかった。単純な嫉妬みたいなもんだと思う。

高校の2年にあがるとクラスの周りの男達は中学の頃も含めて、1年でも一緒だった俺

に誇紫のことをあれこれ聞いてきたが、俺は何も知らないと答えた。誇紫はもう俺にだけ

冷たかったからだ。確かに仲を深めようとは思わなかったが、少しからかうだけで嫌われるようなことをした覚えもない。

仮に嫌なことをしてしまったら、良いことをする。プラスマイナスがゼロの関係。貸し

も借りもつくらない関係。いかにも独りよがりで中二っぽい関係を求めていた。それがシ

ヤクに障ったのだとしか思えなかったが、結局ずるずると今まで来てしまった。

藤咲は美人に分類されているらしくモテる。藤咲の容姿と八方美人のおかげか知らない

がもう何十人からも告白されているのを知っている。そのたびにアイツは断っていた。

「今はちよつとその気になれない」とか「友達から始めよう」とかベタすぎて、あたり障りのない感じで答えていた。

彼女は他に好きな人でもいるのだろうか？

告白してはいけない相手？

教師？

それとも俺が嫌いな生徒会長にでも惚れたのであろうか。

「それで、どんな相談だい？　早く帰りたいから短めにな」
「何で妹と知り合ったのよ」

「それが相談かい？　それなら簡単だ。バイト先に来たから」
竜崎はそれを相談と受けとって席を立ち、帰ろうとした。

「ちよつと待ちなさいよ。それは相談じゃなくて聞いたただけですよ」

彼女はまだ話が終わってないとはかりに竜崎を座らせた。

「わかったから、用件を早く言ってくれ」

「最近、追いかけられる夢を見て以来、誰かに見られている気がするのよ……」

彼女は先ほどまでの態度と違って少し暗い顔になった。

「それは藤咲が八方美人で周りに良い顔ばっかするからだろ」

「それは、知り合いが多く欲しかったのよ。何か困っていたら助けて、私が困った時には助けてもらえるように」

「ギブ・アンド・テイクか」

竜崎はその考えに納得するところがあった。

「でも、お前の場合はギブ・アンド・ギブに近いだろ」

「うん。でも、人を助けたりするのは別に嫌いじゃないのよ」

「何で？　人を助けてもその後には口くなことになかったりするし、労力だけ使っても骨折損だったりするぞ」

竜崎は自分のバイトのことが頭に浮かんだ。

「ウフフ」

三人になってから黙っていた花桜梨が声に出してうつすらと笑う。
竜崎は夢を消せなかった一個下の彼女に目をやると、やりにくさを感じ苦笑いをした。

その視線のやりとりを誇紫は見逃さなかった。

「なに妹を見て笑ってるのよ。手を出したら怒るわよ」

誇紫は妹の守護神のようだった。

「何で俺がお前の妹に手を出すんだよ」

竜崎はそう答えた。

「それで話を戻すぞ。追いかけている夢を見て、それから現実でも監視というかず

つと追いかけられているような感覚になっていると」

竜崎は話を戻し、真剣な顔になる。

「うん。そういうことね」

竜崎はもう少し詳しく話を聞いた。

「わかった。俺にできることは、何もなさそうだから今日はゆっくり寝てみたら？ 気

のせいかもしれないし。気分も落ち着くかもよ。八方美人をやめて八宝菜でも家で食って寝てろってことだ」

竜崎は気のせいだということをふざけながらも強調して、あまり深刻に悩まないように

促したが、藤咲姉妹の姉には逆効果だったらしい。

「もういい！」

彼女は机を叩くと、席を立った。

「アンタに少しでも頼ろうとした私がバカだった」

そういうと彼女は何もわかってくれない竜崎に怒って帰ってしまった。

店内が静まりかえり、二股をかけて喧嘩に発展したと勘違いされた客の視線が竜崎達に

集まり非常に気まずい雰囲気になった。

「八宝菜がいけなかったか」

「店を出ましょう」

椅子に座っていた妹が言いだしたので竜崎も後に続いて会計を済ませそうとした。レジに

まで客の視線が突き刺さるので会計の人が伝票を読み上げ金を払っ

てさつさと店を出る。

そこで竜崎が気づいた。

竜崎は何も食ってないし、飲み物すら頼んでない。食って飲んでいたのはこの姉妹だけ

であった。しかも、片方は注文しただけで飲んですらいなかった。

「ごちそうさまでした」

花桜梨は満面の笑みをしていた。

「いや、いいよ。君みたいな客からバイト代もらってるし」

と答えるも、なぜか損をした気分になった。

家が同じ方向だったので少し話しながら帰ることにした。

「お姉ちゃんがあそこまで自分のことで怒るのって実は珍しいんですよね」

「へえ」

竜崎は興味がなさそうな返事をしたが、確かに誇紫が学校であそこまで怒ってるところ

みたことがなかった。そもそも嫌がらせをされることもなかったの
で、怒るようなことが

なかったと言う方が正確である。

「確かに自分のために怒る姿を見たことがないな。アイツは皆と
仲が良いみたいだし。

なぜか俺には冷たいけど……」

花桜梨はそれを聞くとニコニコ笑っていた。

「お姉ちゃんはシタテなんですよ」

「え？」

竜崎はシタテだけでは意味がわからなかった。

「自分の感情を表現するがシタテなんです。無感情だとさすがに
マズイ。だから、皆に

一律で良い顔をして怒らないようにするんです。そうすれば、誰に
も怒られずになおかつ

自分のうまくない部分を隠せる。というわけなんです」

花桜梨はそこまで言うとし少し暗い顔をした。

「たぶん、それシタテじゃなくてヘタだと思つよ。下手でへた」

竜崎は下手をヘタをシタテと読む人を初めて目にし驚いた。

「雰囲気が伝われば良いんです。どっちにしろ、お姉ちゃんが同級生にあそこまで怒つたのは珍しいんですよ」

「なるほどね。その溜めこんでたとはっちりみたいのが俺に飛んできた」

「すみません」

花桜梨は頭を下げて謝ってきた。

「いや、いいよ。人間は完璧じゃないからどこかしら、欠陥があるし。誰にでもいい顔をする理由がわかつてよかった」

そこまで言うとき大きな川が二手に分かれる橋にたどり着いた。

「この二股に別れている川を見て思ったんですけど、あの店にいたお客さんからは竜崎

さんが二股をかけて喧嘩になったと思われたんじゃないんですかね？」

竜崎も考えていたことを花桜梨も思っていたらしい。

「それ、俺も思った。気まずくてあの店にはもういけないな」

竜崎は笑いながら答えていたが、知り合いがいなかったのを祈るばかりであつた。

そのまま二人は川の橋を渡り別れた。

私は素直になれない自分に嫌気がさした。

少し前に彼の冷たさの中にあるやさしさを見てから気になってしようがない。

普段は私へ無愛想だけど、時折見せるやさしさ。

今日は妹もいたし、もうどうしようもないくらいの失敗、大失敗、超失敗。

あ、カオちゃんに本当にどうやって知り合ったのか聞かないと…。
…。
そう思っているうちに自分の家にたどり着いた。

2

竜崎は少し遅い時間に入ったバイトをさっさと短時間で終わらせる重役出勤もビツクリの仕事っぷりで、愛犬のフォンスと首輪を付けずに一緒に寝た。そうすると真っ暗な空間の藤咲誇紫の夢の世界にたどり着いた。

「フォンス、人の匂いはするか？」

「ちよつと待ってね」

フォンスは言われ一生懸命に鼻を動かした。

「こっちに微かに匂いがあるよ。でも、変な感じがするなあ」

「とりあえず、俺は暗くて見えないから、お前に首輪を付けるからちよつとここに座って待ってろ」

俺はそういうとアグラをかき、太ももをポンポンと叩いた。その音に頼りにフォンスは俺の足の上に丸くなるように座った。

そこでフォンスを足に乗せ座禅を組む様な形になると、そのままフォンスの首に首輪とひもが浮かび装着された。

「よし、これで大丈夫だ」

「じゃあ行くよ」

フォンスは鼻を地面に擦りつけるぐらいの低位置で匂いを嗅ぎながら歩き始めた。

暗闇の中を歩き版犬ぞりのように引つ張ってもらい歩いていくと、
やっと光の空間が見えてくる。

そこは人の顔がたくさん貼ってある場所のようだ。

「なんだこの空間は」

フォンスに話しかける。

「なんなんだろうね」

そこには鏡でよく見かける顔写真もあった。

「俺のじゃねーか。それに何で俺のだけ隔離してあるんだよ」

『WANTED』と書かれた額にわざわざ飾^{がく}つてある。

俺はここまで藤咲に嫌われているのかと思ひ愕然とした。

「人の匂いともう一つ匂いがあるよ」

フォンスがそう言うのとそっちの方へ歩き始めた。

フォンスについて行くと、見覚えのある一人の美しい女性が追いかけられている。

追いかけている方の顔にも見覚えのある名前が思い出せない。

「まてまてー。逃がさないぞー」

「キヤー来ないで。こわいー」

追いかけれながらも笑い合って、夕日が沈みかけている海岸のワンシーンとは程遠い

光景だった。そんな光景を見せられたら間違いなく俺は浜辺に落とし穴を作ってカップルを上から砂で埋めている。

俺が今見ている光景では必死な様子で逃げる女と性欲丸出しで追いかけてまわしている男の姿にしか見えない。

「おーい、藤咲。これがお前の見ていた夢か？」

「何でアンタがいるのよ」

女の方はビックリしながら俺を見て嬉しそうな顔をしていた。

「なんでって言われても、ここが寝ているお前が見ている夢の世

界だからとしか言いようがないな。それよりもコイツ誰？」

確認を込めて藤咲に聞いた。

「この人はウチの学校の生徒会長の井家^{いけ}さん。アンタはいつも寝てるから、そんなこともわからないのよ」

この他にも藤咲はブツブツ話していたが、俺には聞こえていなかった。

「それで君は誰なんだい？」

「俺は単なる通りすがりのあの人の知り合い。それに彼女のこととはそんなに知らないの
でご自由にどうぞ。それより何で必死に追いかけてんの？」

「それは僕が告白しているのに彼女が逃げるからだよ。僕がせっかく好きだと言っ
てあげてるのに……」

「私は断ったじゃない」

「ふーん」

俺はその色恋沙汰には面倒だから全く興味はなかったが、相談された以上は無視するわけにもいかない。仕方なく少し下がった位置で二人を見ることにした。俺は一回失敗しても2回、3回と思い告げて成功して例を知っているだけに他人のやることに口を出すわけにはいかなかった。

幸せそうな二人だったら野次を飛ばしている。間違いない。

私は一生懸命逃げている。

現実の世界であつてもずっと誰かにつけられている感覚はあつた。でも、ここだとハッキリと誰が追いかけているのかわかる。
前に告白されたけど、興味がなかった。

だけど、興味がありませんって断るのは気が引けた。
だから「よく知らないので友達から始めましょう」と答えた。
それからだった。

彼につけられている気がするのよ。

最近では夢にまで出てきて、追いかけまわす。

正直、大嫌い。

でも、それを直接言うことはできなかった。

学校で愛想よくふりまいて、それを言うとうなるのか怖かった。
でも、今日は竜崎君がいる。

彼ならきつとなんとかしてくれる……

彼なら追いかけてくる変態を撃退してくれそうな気がする……

早く、早く、早く、助けてよ……

何で助けてくれないのよ。

何で見ているだけなのよ。

あ、とうとう捕まっちゃった。

顔が近づいてくる。

そしてなんだか獣みたいな顔に変わっていく。

まるでアフリカにいる百獣の王のような顔いっぱい毛。

あれ、これって本物のライオンみたいじゃない

私の服にするどい爪がふれている。

どうやら私は服を破かれ嫌な思いをするらしい。

もう、嫌だ。

私は大声を上げて叫んだ。

「アンタなんか大ッきらい！ 近寄らないで。助けて竜崎」

「おせーんだよ。タコ」

ゲームの主人公のようなかつこうをした竜崎が後ろからライオン
に剣で切りかかる。

その光景を見ながら私は恐怖と安心感で気を失った。

俺は藤咲の叫びを聞く前から準備はしていた。

藤咲が嫌いではなかったが、誰にでもいい顔をするのがあまり好きではなかった。自分

自身にはできないから羨ましくもあったけど、別にそれができなくても困ることはない。

バイトで世渡りを多少は覚えたし。

それに相手が生きている人の形である限り、基本的に手を出すことはしない。

「よお、ようやく化けの皮がはがれたな。エロライオン」

後ろから切りかかった俺の剣をとっさに避けたライオンに話しかけた。

「お前は何者だ」

「答える必要はない」

剣をかまえ、相手が少しビクリした顔するぐらい加速で斬りかかるが、さすがに野生

の勘の反応には敵わず避けられる。こうしているうちに巨大化の足輪をしておいたフォン

スが藤咲を口でくわえ遠くへ行く。

俺は横目で逃げて行ったフォンス達を見ながらこの怪物とどう向き合うのか考えていた。

奴はライオンの攻撃性に野生の強い性欲を兼ね備えてかなり強化されている。まともに

やりあったら俺が負けそうなデータだけはそろった。

お返しとばかりに今度は井家が突っ込んできた。

爪が当たるか当たらないかのギリギリで交わしたつもりが、少し服を持って行かれた。

「あぶねー」

距離を取らないとちよつと危ないと感じ、さっきの距離より間合いをとった。

「きさまは何で邪魔をするのだ。さっきは関係ないと言っていたではないか。今ならお

互い何もなかったことにしよう」

井家は余裕をチラつかせて話しかけた。

「悪いけど、ここで手を引くとか、そういうわけにはいかないんだな」

「なぜだ？」

「さっきの叫びで助けを呼ばれちゃったからな。それに誰にでもいい顔をすることの危

なさを感じてやめてくれると思うから、そろそろアイツに貸しても作ろうかなって思った

のさ」

「ほう。だが、永久にこの空間に出てこられないようにしてやろう。そうすれば今から歌

詞を作る必要もなくなるだろ」

「いつ俺は作曲家になつたんだい？」

百獣の王は俺の言うことを聞く前に心臓を目掛けて全速力で突進してきた。

剣をかまえたが、たった一步しか動けなかった。

だが、一步さえ動ければ俺には十分であつた。

左足を後ろに反時計回りに動かしながら一直線に来るライオンに對し、体を平行に並べ

る形にしてそのまま剣を振り降ろした。

「見事である」

俺は風の通り道の先を眺め、そんな言葉が耳に入る。

「が、私はその程度では倒せんぞ」

「さすが王様ってところか」

俺は笑う。

「何を笑っているのだ？」

百獣のライオンは俺へ向きなおして聞いてくる。

「かつこよく勝とうと思ったけど、無理になっちゃったんだもん」
「そうか。そんな貴様を笑いながら血だらけにして、あの女の前

に捨ててやる。そうし

てあの女は俺のもんだ」

そういうと、男らしい低い声で笑いだし、井家と呼ばれていた怪物は俺へ突撃してきた。

手元にあるもの出し、それを真横に投げた。

「うお、しもふり肉ゲット！」

しよせん、ライオンはライオンであつた。

いくら強くてもサバンナで暮らしている限り貴重な食べ物にはつられる。

俺の目の前で方向転換をし、真横で肉を頬張る。

その瞬間に俺は間髪いれず躊躇なく、首を落とした。

「悪いな。人は知恵を使わないと勝てないんだ」

そういうと獣に目をやり、近くにあつた光る石を見つけた。

何気なくポケットに入れると口に親指と人差指しをいれ、音を鳴らした。

しばらくして、彼女を連れたフォンスがやってきた。

「さっきのピーって音なに？」

「いつもやってるのに、かつこつけて口笛ならしたみたいじゃないか」

そのまま口にくわえられているまだ眠りから覚めていない女に目がいった。

「起こす？ そのまま勝手に起きてもらう？」

「どっちにしろ、ここで首と体が分離しているやつ処理をしないといけないから起こすぞ」

フォンスの口からやさしく離れ、地面に置かれた同級生を見た。

俺は彼女のことを気にしないようにはしていたが、こうしてみると随分と魅力的である。

赤いチェックのパジャマを着て体つきは出ているところは出ている

し、気を失っている

はいえ寝顔はとても美しかった。

俺はそんな藤咲誇紫を見ていて、顔が段々赤くなっていく。
そこでフォンスが顔を舐め起こした。

「ん」

彼女は眠そうに眼をこすりながら起きた。

俺は意識がハッキリする前に見とれていた自分を隠し冷静な顔に戻す。

「起きたか？」

「何でアンタがここにいるのよ！」

デジャヴのような気がしたので聞き流す俺。そしてわざわざ説明し直すフォンス。

「わかったけど、何で犬がしゃべってるの？ しかもデカイし」

俺はそれを聞き、足につけてた足輪を外した。

「夢の中だからなんでもアリだろ」

「そうね」

彼女はなぜかこの一言で納得したようであった。なぜ素直に納得するのか俺にはわから

なかった。きっと素直なんだろうと思う。

「よろしく」

フォンスは丁寧に挨拶をした。

「これがアンタの家で飼っているっていう犬？」

「そう、フォンスっていうんだ」

「何か犬と話すって不思議な感じ」

俺はちよつと前にも同じ反応を見ている。

そう考えながら、フォンスとじゃれている誇紫の姿を眺めていると時間がどんどん過ぎて

て行った。

しばらくたつと彼女が思い出したような顔し、頬のあたりを赤くしていく。

「ありがとう。かつこよかった」

「お、おう。気にすんな」

そっぽを向いて答えた。目を見るとあのライオンと変わらなくなっ
てしまいそうであつた。

た。それほど、藤咲の魅力に気づいてしまった自分に気づく。

「そのさ、モテるのはわかるけど、断るならハッキリと断らない
とダメだぜ。友達から

とかまだ望みがあるようなことを言われると、俺たち男子は諦めき
れないで、またこうい
う怪物みたいのが出てくるぜ？」

「わかつてる。こんなことになるんだったら、今度からハッキリ
と断る。それにもう回

りくどい言い方をする必要もなくなつたし」

そついうと彼女の目は生き生きとしてきた。

そこまで聞くと俺はさつさと作業に入ることにした。

「とりあえず、お前の目の前にいるライオンもどきを消すからこ
れつけて」

そついうと、フォンスの首にある袋から、うさんくさい御札おふだの形
をしたシールを取り出

し、藤咲に手渡す。彼女は特に考えずに胸元に貼る。

もう一つ袋から取り出し、首と体が別れている動物に貼りつけた。
そこで、さらにフォ

ンスの首にかかった小さな袋から、象形文字が書かれている紙を取
り出し地面に置き、呪

文のような言葉をつぶやくと光り始めた。

「よし、終わった」

そついうとライオンの存在はこの空間から消え去り、彼女の記憶
からも生徒会長がスト

ーカーであったことは忘れ去られた。ただ、そこに残るのは元の姿
への少しの嫌悪感のみ

である。

こうした儀式じみたことをしないと、性欲に駆られて野獣になった生徒会長へ影響を与えられない。これで生徒会長への干渉もでき、話を聞かなくても仕事が行えるので一石二鳥であつた。

「不思議な幻想を見ているみたい」

藤咲はそういつとボンヤリ眺めていた。

俺が何をやっているのか、なぜ光っていたのか、そもそも夢だからと言つてなぜ俺が出たのか。第一、なぜゲームのような服を着ているのか。夢とはいえ、何でもありの状態になつているのが全く理解できていないと言つた様子である。

「最後に」

そういつと俺は爆竹を取り出した。

「それ、何？」

「知らなくていいもの」

そういつと、体が段々と薄くなりどこからともなく声がしてきた。

「お姉ちゃん起きて」

藤咲花桜梨が起こしに来たらしい。

この空間が揺れている。

体を揺すっているみたいだ。

俺は爆竹で消せないのなら夢の内容をごまかす方法はないかと考えたが、見つけれなかった。

「じゃあね、広界」

そう初めて下の名前でいつと彼女は微笑んでいた。

竜崎眠い目をこすりながら時計を見るとまだ朝の4時であった。

「あの妹、なかなかの曲者だな」

首輪を机の上で見つけ、寝ていたフォンスに巻きつけもう一眠りする態勢に入り、誇紫

が夢落ちだと勘違いすることを願い二度目の眠りについた。竜崎にとって一度目は寝てないに等しいのだが。

「今は何時だ」

久しぶりによく寝た気分になり、時計をみると針は10時を指している。

学校がある日なら間違いなく大遅刻であるが今日は休みであった。

竜崎は情眠をもっとむ

さぼりたかったが、さつきから何かが激しい音を立て、不快な気分にする。

携帯がバイブでずっとなっていたが番号を見ると竜崎の知らない十一桁の数字が映って

いたので、もっと不快になった。

めんどくせえと思いながらも仕方なく竜崎は電話にでることにした。

「何で電話にでないのよ！」

どこかで聞き覚えのある声がなぜか怒っている。

「いや、この番号知らないし」

竜崎がそういうと黙りこんでしまった。

「わ、私よ、藤咲。藤咲誇紫」

竜崎は声を聞けばわかる、と言いそうになるが余計なことは黙っておくことにした。な

ぜなら面倒だからだ。

「とりあえず、土曜日は空いてるわよね？」

「いや、その日は友達の加藤健介の命日で……。あいつは良い奴

だった」

少し涙ぐんでみせた。

「バレバレの嘘をつかないでよ。同じクラスなんだから嘘だつてことわかるわよ」

適当なことを言うもやはり当然のように見破られた。

「じゃあ、お母さんがたった今死んで……」

「じゃあって何によ。じゃあって。嘘をつくらうまくごまかしなさいよ」

彼女はそういつてきたが、竜崎は溜め息しかでなかった。

「土曜日の朝9時に時計塔の前ね。話があるから。じゃあね」

一方的に電話を切られ、何がなんだかわからないまま用事を入れられてしまった。

竜崎は部屋を見渡すと、寝ている間に妹がフォンスを下に連れていったらしく、部屋にはいなかった。

下に降りると、奈緒がリビングのソファで横になっていて漫画を読んでいた。そのソファの下でフォンスが丸くなっていていた。相変わらずのふてぶてしさに、軽い蹴りでもいれたくなった。

「お兄ちゃん。おはよう。」

「おはよう。母さんは？」

竜崎は冷蔵庫に入っていた、菓子パンを食べ始めた。

「どこかにでかけた」

そういうと奈緒は足元を見ている。

「フォンスを勝手に降ろして散歩に行っちゃったけどいいよね？」

「別にいいよ。コイツ重いし」

遠回しにデブと言ったのがわかるのかフォンスはチラリと竜崎を見てフンツと鼻を鳴らしていた。

その後竜崎はさつさと食べ終わると奈緒に聞きたいことを聞いた。
「ところで、藤咲花桜梨って知ってる？ たぶん、同じ学年だと思っただけど」

奈緒はきょとした顔になった。

「知ってるも何もしらない方が珍しいわよ」

「へえ。どんな子なの？」

奈緒は咳払いをすると説明を始めた。なぜか白衣に牛ビンのようなメガネ姿の妹が竜崎

には目に浮かんだが、錯覚であると信じ話を聞き続けた。

「ようは、美人姉妹ってことね」

「そう。姉の方はお兄ちゃんのクラスにいるはずだよ」

「知ってる。すっげーモテてる。ありや八面玲瓏れいろうで大変だぜ」

「お兄ちゃん、何で素直に発砲美人って言わないで、難しい言葉を使うの？ 何か隠してるでしょ」

「銃で発砲する美人がどこにいるんだ。ここはアメリカのハリウッドか？ それとも映画の中か？」

竜崎はなぜバレたのかわからなかったが、妹のボケた言葉に助けられそのまま洗面所へ

行き洗顔をし自分の部屋に戻った。竜崎は自分だけの空間に戻ると、パジャマ替わりに使

っている、ジャージから着替えはじめた。

藤咲妹の話を聞くと、あの場面でわざと起こしに来るような人には思えなかったが、お

そらくわざとで間違いないだろう。日曜日に呼び出したのもきつと、それで何かするため

に違いないと竜崎は感じた。姉をけしかけて何かをたか集る気だ。

「姉妹だけに始末悪いな」

竜崎は言葉遊びで係ってないのに、うまいことを言った気になっ

ていた。

せつかなのでもう一回睡眠をとって三度寝をしたかったが、段々と気分が重くなっていくのを竜崎は感じた。

翌日、学校に登校すると藤咲誇紫と目があうと、藤咲はすぐに目をそらしてしまった。

隣に座っていた加藤がその様子を見て話しかけてきた。

「コウちゃんなんかしたのか？」

「知らない。なぜか、俺だけには冷たいからな」

そついうと加藤の視線が竜崎を捉え続けていた。

「誰の話してんの？」

「ほえ？」

竜崎は間抜けな反応をし、廊下をみると妹と最近知り合ったもう一人の女子の二人が立っていた。

「俺が言ってるのは廊下にいるコウちゃんの妹だよ」

「俺は不幸な腹痛になって休みだつて、奈緒の隣にいるのに伝えといてくれ。」

竜崎はそう言い残し、後ろの方の席からベランダへ急いで出て隣のクラスに入り、そのまま廊下に行き、トイレに逃走した。

息を切らせ、トイレの個室に駆け込む。まるで、大きい方をしたくてたまらなく駆け込んだ様に周りには見えるが、本人にしてみればそんなものは二の次である。

おい、どうなってんだよ。

何で、あいつは妹を連れて教室にきやがった。

間違いないく狙ってやってやがるぞ。

姉妹揃って俺をどうしようってんだ。

あの妹が藤咲に「いいおもちゃが見つかった」とでも言ったんだろ。

何で助けたのに俺がこんな目にあわないといけないんだ。

関わった俺が悪かったのか。

一瞬でも誇紫を見直そうとした俺が馬鹿だった。

馬みたいに口に銀のはみをされ手綱でも付けられ、奈良公園の鹿みたいに角を切られて。

あ、でも角はないから別の危ない固いところを切られ、四本足で歩かされるだろうか。

何でもそもそもアイツが俺の番号を知ってるんだ。

ますます意味がわからない。

さて、どうする。

竜崎は自問自答していた。

そこで彼は誠心誠意ゴマをすることに決めた。あのうさんくさ店の店長に逆らえば、何

をされるのか検討がつかないので、どうしようもないのがわかっていた。それならあの姉

妹にゴマをすってる方がマシであった。

竜崎はチャイムが鳴り少したってから、帰ったと確信できてから教室に戻って行った。

当然のように担当の先生からは怒られたが、それどころではなかった。

従順な僕と眠気

第四章　従順な僕と眠気

1

俺は帰りに下駄箱を開けると中に前に見かけた感じがする手紙と『家に帰ってから読んでください』とPCで書かれ、印刷されたであろう一枚の紙が入っているのが見えた。

「おい、また不幸の手紙かい？」

「わからん」

嫌な予感はしていたが、カトケンに感覚的なことを言ってもしょうがないからそのまま

鞆に入れて下校する。下校途中に人通りが少なくなり、とても気になっていた中身を確認

するとやはり不幸の手紙であった。

『明日は現金たくさん持ってきてね。遅刻したらわかってるよね？』から続く、文章が

連なって書いてあったが、もう読む気すらなくなっていた。もちろん、拝啓などの固い

手紙で使われるような言葉は一切書かれていなかった。

「帰りに見たな」

その代わりに後ろの電信柱の陰から何かドス黒い声とオーラを感じ、恐る恐る後ろを振り返っても誰もいない。

そして差出人は書いていなかったが、なんとなく見当はついた。

「あの姉妹は俺をどこまで追い詰める気なんだよ……」

結局、竜崎はこのまま眠れずに朝を迎えてしまう。

「面倒だ……」

竜崎はつぶやきながら首輪をしたフォンスと一緒に下へ降りると、普段は家で部屋着し

かきてない妹が少しハデな外行きの服を着ていた。

「みんなおはよう。あれ、奈緒どっかでかけるの？」

「うん。友達とね」

妹は随分とウキウキしているようであった。

「お兄ちゃんも今日は早いね。どっか逝くの？」

「まあちよつとねって何でそっちのイクなんだよ。俺はまだ墓には行かないぞ」

「てか、いつもより眠そうだよ？」

「いつも通りだ」

これから金を脅し取られに行くという哀れな兄の姿を見せたくないのか、そういうと朝

ごはんを食べ、着替えて竜崎は出かけた。

俺は時計塔の前に三十分前につき、近くにあったベンチに腰をかけると、ふと眠くなっ

てしまいそのまま寝てしまった。

「ねー、起きなさいよ」

誰かに肩を揺すられ、起こされている気がした俺は目を開けると、そこには藤咲誇紫が

制服とは違いオシャレな姿で立っていた。

「肩まで揺すって、金まで揺する気か。お前は鬼か！」

俺は寝ボケた頭で考えられる限りの嫌味とトンチを聞かせて言っ
てやった。

「は？ もう行くわよ」

そついうと藤咲はサッサと歩いて行った。

無言のまま行きついた先は映画館。

「あのー何の映画なんですか？」

俺は恐る恐る聞いた。

「なに急に他人行儀になってるのよ」

そついうと彼女はうれしそうに割引券が付いたチラシを見せてきたが、タイトルを見て

愕然とした。

「地獄への13階段〈序章〉」

俺はその文字を見て復唱をした瞬間に悟った。俺はこれまでの生活が今日から始まるんだと。

「そうよ。ホラー映画よ。あんた嫌いなもの？」

「いや、大丈夫です」

と苦笑した。チケット売り場で並びどんどん前へ行く。

「高校生2枚」

藤咲は指で2を作り、笑顔でチケット売り場の人に注文していた。俺には「これから地

獄におくつてやるぜ」って笑いながらピースしているようにしか見えなかった。地獄へ送

られるのは映画の人ではなく、俺です。

周りで見ている男どもは「あんなかわいい人と一緒に歩いてるのに何で楽しそうじゃな

いんだ。ひよつとして緊張して寝不足だったのか？」って視線を送ってきている。寝不足

は認めるが、死刑執行に向けて着々と準備されているようにしか俺が思えないのは誰もわからないらしい。

指定された席につき、藤咲は通路側を俺に譲ってきた。

「逃げたらわかってるんだろうな」と受け取った俺は元々ほとんどなかった逃げる気も

完全に失せていた。

俺にこの映画を見せて恐怖のどん底に落とす魂胆であろうというのはタイトルを見た時からわかっていた。

映画が始まると辺りが真っ暗になり、眠くなってしまい俺はこともあるうか、執行官の隣で寝てしまった。

「ここは夢の世界か」

俺はふとフォンスが居ないことに気が付いた。

最近は他人の夢に行っただけであったが、今度は自分の夢にきたらしい。

どうやら、目の前で五円玉を糸で釣ってそれを振り子のように操っているやつが、俺の

この夢の元凶らしい。

「おい、何やってんのお前」

「拙者は貴様がますます眠くなるように催眠術をかけているところだ」

「これ以上眠くなると困るんだけどさ」

五円玉で催眠術自体、だいぶ古いと思ったがわざわざ口には出さない。

面倒だからだ。転がり込んでくる面倒な事であればしょうがないが、自分から面倒なこ

とに関わるうとは思わない。

「だから、催眠術をかけてるんだろ」

「えっと、まずゲームと勘違いしてない？ 催眠術で眠り状態になるのは初代が151

匹のモンスター達を戦わせるゲームとかだぞ」

「じゃあ、これはなんだんだ！」

なぜか逆切れしてきた。

「知るか！」

俺もわからないと説明してやり、なんとなくむかついたから土足で人の夢に出てきたことを後悔させてやろうと思った。

俺は手に西洋風の剣を取り出し、目の前にいる間抜けな黄色のバクのような恰好をした動物を真つ二つにした。

「睡眠欲ぐらい、元々あるわ」

俺がそういうと、さっきまであった5円玉の代わりになぜか木の枝が落ちている。

それを竜崎はバキつと踏みつけへし折り、眠りから覚めるのを待っていると言った。

音がし、透明に輝く石に変わった。前にも見たことがあったので拾い上げポケットにし

まうと今度は叫び声が聞こえた。

手から剣が急に消えてしまったので、どこから来るのはわからない敵に向けて、仕方なくボクシングの要領で構えた。

「アンタ何やってんのよ」

竜崎は映画の最中に悲鳴を聞いて、寝ぼけて立ちあがると両手を胸元の上までもっていき、これから殴り合いが始まるかのような雰囲気を出していた。隣に座っていた真つ赤な顔をした藤咲に手を引っぱられ慌てて席につかされると竜崎も顔が真つ赤になった。

映画が終わり、藤咲は激怒していた。

それもそのはずである。

あの後、映画の最中とはいえ、ずっと周りから見られている気がしていたからである。

「恥ずかしいじゃない」

藤咲はそういうと下を向いてしまった。

「ごめん。寝不足でさ」

「楽しみにしてたのに……」

そういうと泣き出しそうな顔になってしまった。

竜崎は、藤咲が楽しみしていたのはこれから始まる人から金を搾り取る惨劇であろうと

思っていたが、彼女にこのまま泣かれるのはさすがに悪い気がした。カバンに入っていた

ハンカチを渡し、そのまま藤咲の腕を引っ張りそのまま近くの店に入っていく。

「昼、食へに行くぞ。お前が言ったように持ってきたからだしてやるから。ファミレス

でいいよな？」

竜崎がそういうと、藤咲は目に二、三回ハンカチを当て竜崎の後に続いた。

2

女子にあんな顔をされたら、諦めるしかない。それにしてもと、竜崎は考えた。

よりによつて、値段が高いファミレスに来てしまった。

「本当におごってくれるの？ 悪いから自分の分の半分は出すよ？」

「出しても自分の分の半分かよ。いいよ、一度言っちゃったから全部出すから」

そういうと藤咲はニコニコと喜んだ様子でメニューから選び始めた。

「アンタは決まったの？」

「大体、決まった。とりあえず、アンタって呼び方はやめてほしい」

「じゃあ、アンタもお前って言うのやめてよ」
そういうと藤咲は呼び名を考えた。

「じゃあ、ヘッポコ戦士」

「帰れ」

「じゃあ、ゲリP i i（自主規制）」

「言葉が隠れてないぞ。それにもう忘れてくれ。しに行ったわけじゃないから」

竜崎は藤咲の口から出てくるセンスのセの字もないあだ名を却下していった。

「わがままだな」

それまでに出ていた全てを却下されると藤咲はアゴに人差し指をあて考え始めた。

「ザツキー！」

これならマシに感じた竜崎はこれで手を打つことにした。

「私は下の名前で呼んでくれていいよ」

「わかった。古紙」

「私はリサイクルの使い回しじゃないわよ。ザツキーなんだからコッシーでいいわよ」

そういうと、藤咲は店員を呼びメニューを頼んだ。

竜崎は学校で急にあだ名で呼び合ったら色々と聞かれて面倒なことになると頼杖をついていたが、考えてもしようがないのでトイレに行くことにした。

彼がテーブルに帰ってくると見知らぬ男が藤咲に話しかけている様子を目にする。

店員さんがやってきた。

竜崎は料理を待ってる間にトイレに行き、帰ってくるとテーブルに見知らぬ男がたっていて、藤咲に話しかけていた様子を見ていた

「チツ連れかよ」

男はそういうと、立ち去った。

「知り合い？」

「いや、知らない人。ナンパじゃない」

「学校でも外でもモテモテですな、コッシーさん」

竜崎はそう言いながら席についた。

「ザツキーも居眠りしてばっかしてるんじゃないくて、頑張ればモテるんじゃない？ 高

校に入ってから授業中によく寝てるみたいだし」

「ほつとけ。ふるがみ」

そういわれ藤咲は少しふくれたが、同じクラスにいてもお互いに話すことがないため、

なんだかんだ次々に話題ができて二人で盛り上がれていた。料理が来てからも話は続き、

盛り上がったまま食べ終わると、藤咲はカバンから近くの遊園地のチケットを取り出した。

「これ、今日までだから良かったら行かない？」

「いいけど、他の人と行けば良かったじゃん。俺より良い人いただろうに」

竜崎がそういうと、急に藤咲は機嫌が悪くなったのか少し乱暴な口調になった。

「私と行きたくないのね。わかったわよ。あの妹と行けばいいじゃない。妹に教室に来

られて、デレデレするのを見られたくないから来ないように言っているシスコンのくせ

に！」

彼はなぜシスコンと言われているのか理解できなかった。来てほしくないのは、あの妹

は目立つからそれ目当てで声をかけられても面倒だからだ。

「何で、妹をしってるんだよ」

「この前、カオちゃんと教室に来た時に紹介されたのよ。脱兎のごとく逃げ出したのは

黙つといたから感謝しなさい」

「あれほど、来るなって言つといたのに……」

竜崎は溜め息をついた。

「何で来てほしくないのよ」

「言いたくない。ところで何で、お前の妹がわざわざ誇紫に紹介しに来たんだ？」

竜崎はさりげなく探^{さぐ}りをいれた。

「逆よ。ザッキーの妹、奈緒ちゃんだっけ？　ウチのカオちゃんをお兄ちゃんに紹介するんだって言つてたのよ。どういうことかしらね？」

さつきまで温和な雰囲気だった、藤咲のオーラがドス黒いものに変わっていくのを竜崎は感じた。

「いや、ほら。この前会つたろ？　それだよそれ。一応、相談された側だからどんな様子

かなつてさ。バイト先に来たからアフターメンテナンスみたいなもんだよ。アハハ……」

少し後ろにのけぞりながら答えた。

「へえー。妹をアフターメンテナンスですか。何をメンテナンスするのかな。まさか体

じゃないわよね？」

「あ、それはない。年上の方が好きだから」

竜崎は藤咲が拍子抜けするくらいあっけらかんとした口調で好みを言つた。

「まあ、いいわ。それでバイトって？」

「相談員。うさんくさい店にうさんくさい店長にうさんくさい店員。これが揃うとなぜ

か人が集まる。ほーら不思議」

「全部うさんくさいじゃない」

「だって、本当なんだもん」

「まあいいわ。それで妹はどんな相談してたの？」

「守秘義務があるからこれだけは言えない。家族にもね」

竜崎はそれが絶対防衛線であることを目で訴えた。

「妹が感謝してたから、どんなことだったのか気になっただけよ。ありがとう」

竜崎は「あの妹が感謝してたけど？　嘘付け！」と喉から出そうになったのを口に手を入れて無理やり抑えた。

そして昼食前に思っていたことを聞いた。

「ふがふが言ってるんじゃないわよ」

手を入れたまま話そうとしていた竜崎を藤咲が笑う。

慌てて手を抜き、竜崎は真剣な眼差しで藤咲を見つめる。その視線に藤咲は顔を赤らめた。

「金持ってこいとか言ってたけど、いくら俺から取る気だ。妹だけには手を出すなよ」

「何よ、ジツと見つめて。それにいくら取るってなんのこと？」

「お前ら姉妹が俺から金をとる気だろ。下駄箱にお金をたくさん持ってこいって書いてあったのはそのためだろ」

藤咲は口を魚みたいにくパクさせながら首を振っていた。

「どうやら何も知らないらしい。」

「私は、単純にザッキーにお礼がしたくて誘ったのよ。顔を真っ赤にして下を向いた。」

「へ？」

竜崎は拍子抜けしてしまった。

「妹のこともあったし、それに妙にリアルな夢に出てきて助けてくれたのよ。ザッキー」

が」

最後は消え入りそうな声でそう言った。

竜崎はドキっとはしたが、それを表に出すわけにはいかなかった。

「ほら、行くぞ。遊園地」

そういうと、竜崎は気を紛らわすように席を立ち会計をすませると藤咲と二人で遊園地

へ行くために店から出て行った。

3

この遊園地は街の中にあるとはいえ、なかなかの広さをしている。立地がまずまず良いためにチケットの値段がはつきり言っただが、午後からだとな

チケットの値段が時間ごとにどんどん下がっていくために子供連れの親子も昼ぐらいから

でもどんどん入園していく。竜崎達は藤咲がチケットを係りの人に渡し、入園した。

「まず、何乗ろうか？」

「何でもいいぞ」

「じゃあ、ジェットコースター乗ろう！」

そういうとジェットコースターの方へ歩いて行った。

テーマパークの代名詞のジェットコースターの乗り場は人であふれていた。

前を背伸びで見ても先が見えない。待ち時間を見てみると三十分となっている。

「どうする？」

「んー、他のにしようか。あんまり人がいなさそうな、コーヒーカップに行こうよ」

二人はコーヒーカップには並ばずに乗り込んだ。

藤咲は椅子にちょこんと座っていたので、竜崎は調子に乗って、すごい勢いでハンドルを回し始めた。ぐるんぐるんと台風のように回っている。

「目が回るよ」

藤咲は笑いながら竜崎をみたが、回しまくっていた本人の顔が真っ青になり、ひきつっているのがわかった。

「どうしたの？」

心配そうな顔で竜崎に聞いた。

「寝不足だったのに調子乗りすぎた。気持ちわるオエッ」

竜崎は少し涙目になり今にも吐きそうだった。

乗る時間が終わり、フラフラしながらベンチまで行き座った。

「うゝ気持ち悪い」

彼はベンチの上の縁に腕を乗せ、天を仰いだ。

「前もって言ってあったのに、何で寝てないのよ」

「いや、これから脅迫される高校生活が始めると思うと、恐怖で寝れなかった」

昨夜から思っていたことを素直に述べた。

「ばか！」

「俺は成績だけならお前と同じぐらいだと思っぞ」

「そういう意味じゃないのよ」

藤咲は溜め息をつく、竜崎がしばらくベンチに座ることになるので飲み物を買いに自販機へ出かけていった。

しばらくすると、藤咲が竜崎の元へ戻ってきた。

「一人で遊園地に来たと思われて変な人に見られたぞ」

「それは顔色が多少よくなったけど、白い顔でいたら不審者に見られるわよ」

はい、と手渡された緑茶を飲む。

「何でコーラにできなかったの？」

「気持ち悪い人に炭酸なんて飲ましたら大変なことになるでしょ」
「さっすがー。気配り上手な八方美人さん」
「もう！ やめてよ」

藤咲はそういうと竜崎の隣に座った。

どうやら、ここでは藤咲は目立っていて見られるたびに時より下を向く。

「着ぐるみでも来て、顔でも隠せば？」

「何だよ。私はいままでそういうことしてないの」

「姉妹揃ってハーフってのも大変だな」

「ハーフって言わないでよ。私達は半分じゃないの。ミックスよ」

「そうだったな。ハーフって言われると嫌がる人がいるのを忘れてた。それに日本じゃ

閉鎖的なだから余計に目立つもんな」

「だから、目の敵にされて嫌われないように皆と仲良くしようとしてるんじゃない」

やっぱり藤咲の妹は見えてるようで見えてない、と竜崎は感じた。

「まあ、誰にでもいい顔をして愛想をふりまくのは、八面玲瓏はちめんれいろうみ

たいに良い意味で使わ

れないで、悪い意味で使われる八歩美人だっひねて見ている捻くれた奴

もいるってこった。誰

とでも付きあえるのは良い事だけど、逆にいえば誰にでもいい顔をしてるって見られるん

だよ。特に、藤咲は目立つから」

「ひねくれてる本人に言われると説得力があるわね。参考になった」

「うるせーやい。参考になっただけで十分だ」

竜崎はそういつて藤咲の方とは反対方向を見て腕組みをした。

しばらくゆつくりと休むと気分が良くなってきた竜崎は聞き覚えのある声を耳にした。

その声の方を見てみると、見覚えのある顔が2つほどあった。

「藤咲、あれって」

竜崎は思わず、指をさして隣に声をかけた。

「あれ、カオちゃんじゃない。それに妹さんも。後は……」

おいおい、と竜崎は思ったが、既に立ち上がり動こうとしていたのを必死に抑えた。

「やめとけて、目立つんだから」

「ザツキーは妹が男と一緒に良いわけ？」

藤咲は竜崎に聞いてきたが、竜崎は当たり前のように言い放った。

「コッシーそれは愚問だよ」

チツチと人差し指を左右に振る。

「後で、一緒に居た男達を陰に引きずりこんで処分するんだよ」

「なかなかヒドイことするわね。直球で勝負しないのね」

「日本人らしいだろ？ 周囲の目を気にして直接言わずに周りから攻めていくのは」

竜崎はニヤリと笑った。

「まるで昔の城の水攻めみたいね、ジワジワとやる感じが」

二人で不気味な笑いをしていたが、お互いの妹たちを見失う。

「色々な乗り物を取りつつ園内を探してみるか。せっかく来たんだし」

竜崎はそういうと藤咲と歩き始める。

「あれ、やるか？」

竜崎が少し歩いたところで指さした先にはバンジージャンプがあった。

「え、あれはちょっと妹も探さないといけないし……」

藤咲が少し躊躇するも竜崎はバンジーへ向けてどんどん歩いて行く。

「ザツキー怖くないの？」

「別に俺はスカイダイビングもやってるし別にあれぐらいなら怖くない。ゴムが切れ

てゴムなしバンジーじゃなければね」

と、竜崎が少しからかい半分で口に出すと、藤咲は元々なかったやうな気がマイナスの値

にまで下がったらしく、近くにあったベンチに座って待っていると言った。

竜崎はゴムをつけ、係りの人の合図で3、2、1、ゴーの後に迷いなく飛び出す。

両手を広げ、そのまま飛び出す姿は鳥が海の中の魚を捕るために急降下するように綺麗

な形であった。その姿を見ていた藤咲はしばらく上下に漂っていた竜崎の元へ向かいに行

きまた二人で歩き始めた。

彼らは色々遊びながら最後の場所に行ったが、結局見つけられなかった。

「チツ、みつからなかったな。始末してやろうとしたのに」

「アンタそのままストレートに言っちゃってるわよ」

「ゲーセンにいるかもしれない。最後だと思って行ってみよう」

二人は目の前にあったゲーセンに入っていくが、そこに妹たちはいなかった。ゲーセン

の中を歩いても見つからずに結局、二人は諦めることにした。

そうすると、藤咲が竜崎の腕を引っ張る。

「何？」

「あれ撮りたい」

藤咲は指さすと、プリクラを撮るためにカーテンの中に入っていた。

「別に撮ってもいいけど、人に見せるなよ。学校でどういことなのか男子に囲まれて、

袋叩きに遭ったら面倒だからな」

「わかったわよ。額縁に飾って家で保管するわ」

それを聞いて竜崎は夢で見たWANTEDの張り紙を思い出しゾ

ツとした。

「とても冗談には聞こえないな、アハハハ……」

竜崎は自分でも顔がひきつり、無理に笑っているのがわかった。結局二人で並んで撮り、陽が沈みかけていたので、そのまま遊園地をでて別れた。

藤咲はその帰りに数年前のことを思いだしていた。

私は中学の時、友達と電車に乗り隣町に行こうとしていた。

電車の中は朝のラッシュ時のような混雑はなく、車両の端から端まで見渡せる。それで

モチヲホラ立っている人を見かけるぐらいの混み具合で早い話が割と空いている状態である。

そんな車両の端の方に私たちはいた。

「この前の映画見た？」

「見た見た！」

「超面白いよね！」

「コーちゃんも見たよね？」

私に話をふってきたのは柚子^{ゆず}。背が低く、身体つきから全体的にこじんまりとした印象を人に与える。

「かつこよかったよね。特に最後のシーン」

「そうそう」

私の氣に入ったシーンに相槌を打ってきたのは伊代^{いよ}。化粧もしないし、黒髪で伝統的な

日本人の清楚な印象を与える。

「バイクから飛び降りてトラックに乗り込むところもかつこいいよね」

蜜柑^{みかん}が別のシーンを提示する。この中で一番派手な印象を与える。4人でテレビでやっていた映画の話をしていると、一人のお婆さんがこの車両の反対側

に乗ってきた。そのお婆さんは優先席の近くに立つも急に寝たふりを始めた人達で席を譲ってもらえないようだ。

そんな時に後ろから声をかけ、席を譲る少年がいた。

お婆さんは断っているみたいだけど、私からは顔が見えない少年は次の駅で降りるから

とか言っていた。そこまでであつたら、私は何の印象も残らなかったはずだ。

案の定少年は次の駅で降り、私達の前を通って行く。そこでハッキリと彼の顔を見た。

同じクラスの中で唯一、私と仲良くない無愛想な竜崎広界であつた。そして彼は改札の方

へ向かつていたが、そこで私達がいる側の隣の車両に乗っていった。彼は、お婆さんが遠慮しないで譲った席に座れるように駅で降り

る仕草をみせたに違い

なかった。私はそんな彼に強くひかれた。さりげないやさしさを感じ、それから彼を目で

追うようになった。

しかし、彼は誰とでも仲良くしようとする私を毛嫌いしているようであつた。たまたま

私たちは同じ高校に入学していた。私は何人からも告白をされるが、さりげない気遣いの

あのやさしさ以上のものを感じず、上辺だけのような気がしてしまい断っていた。

今まで、相手に魅力を感じないで、断る立場であつた私が断られる立場になりたくなか

つたから大人しく見ていただけにしよう。

これ以上は嫌われたくないから……

彼はクラスの中で面倒だと言いつつも、結局は嫌な作業を手伝ったりしていた。面倒な

ことが回ってくるタチらしい。

そういえば、高校に入ってからよく授業中によく眠っているのは
なんだろう。今度聞
いてみよう。

マザーとアザー

第五章 マザーとアザー

1

竜崎は翌日、バイトに来ていた。

バイトの佳代と店長が話していた。

「懇親会楽しかったですね」

竜崎より年上の女子大生が楽しそうに話していた。

「それいつつすか？ おれ呼ばれてないっすよ」

竜崎は仲間外れにされた気分になった。

「だって、お前が土曜日は忙しいとか言ってたじゃん。しかも、すっごい低いテンションで」

店長がそういうと、竜崎はそういえばと思い出す。

「2日前に急にそういう予定を聞かれても、空いてない時もありますよ」

店長は予定を入れるのは急であつたり、やることがいい加減であつたということがある。

よくある。そのおかげもあるのかどうかはわからないが、厳しくなく接しやすい人柄でバイトからも人気がある。

雰囲気は良くても、なぜ人の相談を受ける店がこの店長でうまくいっているのか竜崎は不思議でしうがない。

「今度は最低でも一週間以上前に言ってくださいよ」

竜崎はそう伝えると、どこにいったのか気になった。

「ところでどこに行っただんですか？」

「近くの遊園地で遊んで楽しんだのよ」

なぜか、女子大生のバイトがニヤニヤしていた。

「そういえば、昨日はお楽しみだったじゃないか」

店長は言葉のフックを放っていた気でいた。

墓穴を掘ったと気づいていない竜崎は何を言っているのかわからなかった。

「あんな美人の彼女なんて連れちゃって。竜ちゃんも隅におけないわね」

佳代がそんなことを言ってきたが、竜崎本人はやはりサッパリであつた。

「彼女？ はて……？」

「遊園地で一緒に遊んでいたあの子彼女じゃないの？」

あー、と竜崎は思いつく。

「あれは単なるクラスメートですよ。中学も同じだったんですよ」

「あの子はモテるだろ？」

「はい。だから、早く良い人がみつかるといいですよ。学校で男子から告られて何人も断っているみたいなんです。ハードルをかなり高目に設定してるんじゃないですかね。自分

分に自信がないとできませんよ」

「それでいつ口説くのよ？」

「早めにしろよ。あのぐらい美人な子なら他の奴にすぐに取られるぞ」

店長と佳代はせかしてきたが、全くその気のない竜崎には何のことかわからなかった。

「いや、自分はアイツに好かれてないし、昨日は単に向こうがお礼をしたかっただけみたいですから。アッチも自分に気なんてないですよ」

竜崎はそう答えると笑っていたが、店長と佳代は溜め息をついて、額に手を置いていた。

「どうしたんですか？」

「いや、なんでも無い。仕事に戻れ」

そういうと店長は首を横に振りながら裏に戻り、佳代は自分の持ち場に帰っていった。

今日の仕事はあと一件だけであつた。

Aさん主婦。それだけしか書いていなかった。

「それでどういった相談でしょうか？」

「夢で人の形をしたへびみたいな大きな、化け物に子供が襲われて食べられそうになる

夢をみたんです。夢だけで何も起きてないんですけど、ちょっと心配で……」

ふむふむ、と竜崎は簡単にメモをしていき、今日は安心してゆっくり寝てくださいとい

うお馴染み締め言葉で帰ってもらつた。

竜崎は夢に出てきた怪物について、メモを見ながら店の自分の持ち場を片付けながら考えていた。

どうやら、夢に出てきたのはラミアのようであつた。

普段、竜崎は神話などに興味はないがRPGに出てくるキャラや敵キャラのモデルぐら

いはある程度、加藤を通じて知っていた。彼が聞いたところによると、父が海の世界ではみんな大好きリヴァイアサンの次に有名なポセイドンらしく、ゼウスとかいう神の愛人だつたらしい。

「へびの下半身に人間の姿のような上半身つて、やっぱり現実じゃありえないな」

片づけがおわると、店長に挨拶をして帰っていく。

夢で前に店長が拾つた石を自分も拾つたという話をしようとした

が、店長はどこかに電話をしていて忙しいらしく、竜崎はまた後日に話すことにした。家につくといつも通りフォンスの首輪を外し、眠りについた。

2

「おーい起きてよー」

犬が顔を舐めて俺を起きるように促す。俺はいつものように起き上がり移動しようとする。俺たちは妙にリアルな地響きが近くで起きるのでラミアの位置はすぐに知ることができ、一緒に移動を始めた。

「今日はいつもより、嫌なおいだ」

「どんな匂いだ？」

「匂いじゃなくて、臭いって言った方がいいのかな。とても、言葉じゃ説明できないけど、禍々しいというか今までの匂いとは雰囲気が違う感じ」

コンコンと俺はあいつちを打ったが、フォンスの臆病っぷりは知っている。

散歩中に犬が来ると吠えられる前にすでに逃げ出そうとする。まさしく『尻尾を向いて逃げる』の慣用句そのままに長い尾を巻いて逃げ出す。よその犬に立ち向かっていきワンワン吠えあわないから何も言わないが見ていて情けなくなる。そのくせに犬が立ち去ると後ろから匂いを嗅ぎに行こうとする。

俺はフォンスの臆病さを考え、大した心配ではないと思う。

「じゃあいきますか」

俺はフォンスを促し、歩きはじめる。フォンスはかなり不安そう

な顔をしているのが人の俺でも見ていてわかる。こういう時はさっさと倒して現実に帰るのが一番だ。

しばらく歩くと小さい子供を抱えて、身を隠している親子が目に入る。巨大なラミアは

目が見えないらしく、ところ構わず暴れているのか親子の方には向かっていなかった。

「さっさとやりますか」

俺はそうつぶやくとラミアの前に立つ。やはりコイツはデカイ。

ヘビの尾を地面にたた

きつけ、地震を起こし人々を脅かしているような印象だった。なぜか歩いてきた俺たちの

所へ向かってきたのかを考えると音で察知しているのかという推測がなりたった。

「フォンス。ためしに向こうまで歩いてこい」

俺はそういうとフォンスをラミアの前からと離れた。フォンスの足音にラミアは反応す

るが、俺はすかさず剣を取り出し腹の辺りに切りかかった。

「いったきー！」

一撃で仕留めるべく、いきおいよく斬りかかる。

だが、固い鱗で覆われているのか弾かれて全く効果がない様子だ。そして、弾かれた俺

の手はビリビリしびれた。

「何で子供を食べようとするんだ」

俺はとありあえず話しかける。

「何で私の邪魔をするの」

「質問を質問で返すな。このボケ」

それを聞くとラミアは手から先が3つに分かれたフォークみたいなものを取り出し、突

き刺してきた。やはり声の音でわかるのか、目が見えない割には正

確に体へ向かっている。

だが、距離が遠かったので俺には届かない。

「危ないだろ。まだ話している途中だろ」

「質問に答えないあなたが悪い」

「先に質問したのはコツチだ！」

「うるさい人ね」

ラミアはそういうと、尻尾を叩きつけて足の自由を奪った。

遠くではゆっくり逃げようとする親子の姿が目映る。親に庇^{かば}わ

れた子供はラミアを見

て改めて泣き出しそうになる。

「泣いちゃダメだぞ。音でバレちゃうぞ」

俺がそういうと、母親が子供の口に手をあて立ち去る。

「余計なことはいしないでって言ったわよね」

ラミアはヘビが意外と素早いようにサッと近づいてきて、ヤリが届く位置までやってき

て一突きしてきたのを俺は後ろに下がりがわす。俺はそんなラミアと距離をとるために忍

び足で足音ひとつたてないで後ろへ下がり、ラミアを見上げた。

「それはポセイダンの槍だろ。何でお前が持ってるんだ？」

「お父様のものを娘が持っていて何が悪いの」

初めてまともな会話が成り立った気がした。

今度は槍を持つラミアの両腕に狙いを定め、店長に無理やりやらされた逆バンジーの要

領で高く飛び、右腕に切りかかった。

「ウオオオ!!!」

そうするとラミアは右腕だけで槍を振り回し、俺を吹っ飛ばした。やはり声や音に反応

しているのは間違いない。

そして風が俺の背中を通り抜け、体は段々と下へ降りて行く。俺はそのまま地面に転が

り落ちてしまい、今までに味わったことのない痛みを感じた。体中に擦り傷までできている。

おかしい、までの夢であつてもここまでの痛みはない。

「これが神話の怪物クラスのか」

これは俺が認めざるをえない事実である。

「怪物、怪物つてさっきから失礼ね。ゼウス様に叱っていただくわよ」

「ゼウスも奥さんに怒られて何もできないんじゃないか」

ラミアの顔が露骨に怒りに見て行くのがわかる。

そういえばと、目が見えなくなつた理由を俺は思い出す。

「確かゼウスに目をくり抜かれたはずのに、なぜ様までつけて敬愛するんだ？」

「ゼウス様は良い人よ。あのヘーラとかいう女がいけないのよ」

そういうとラミアは俺が知らない部分まで話し始めた。

しばらく、ラミアは一人で喋り続けた。その話を聞いていると、なんだか夢の世界に来てまで相談屋の仕事しているみたいだ。それにラミアの言うことが

事実であれば、俺たち

人間の感覚だと常軌を逸してるようにしか思えなかった。

「そうか、ゼウスとの間にできた子供を正妻のヘーラに皆殺しにされ、その上眠れない

ように呪いをかけられたか」

「そうよ。そして子供を探さなくていいように目をとつてくれたのよ」

さすがに一夫多妻制の世界でそんなことをされたラミアを俺は同情した。

「他人の子供を食べるなんて母親であつたお前も辛かつただろうな。でもな、さすがに

それはやつちやいけないんだぜ」

正直にいうと俺はどう戦えばわからなかった。

今までは運がよかったのか、ギリシア神話に出てくるような怪物クラスを相手にしたことがなかった。それにこの悲劇的な怪物と化してしまった彼女をこのまま倒してしまつていいのかわからなかった。

倒す方法と理由の両方で悩む。

そうするとラミアが口を開いた。

「私が眠ることができれば、かつてに扉の向こうへ帰れる。人の子供が出てくる世界と

は別の世界へ戻れるから子供を食べることもなくなる。そして私がここにいれば子供を食

べつくす。そろそろ、現実との扉も開くし」

そこまでいうとラミアは俺に少しのあいだ不気味に微笑んできた。

「さて、あなたは私をどうしてくれるのかしら？」

そういうと、ラミアは眠る気がないように尾を地面に叩き震動を起こしている。

俺はラミアを眠らし向こうの世界へかえしてやることにした。それにはラミアを眠らせるといふ難しい作業が伴うが……。

ただ、俺にはその前に1つ気になることがあった。

「扉ってなんだ？」

「自分で調べなさいと言いたところだけど、話を聞いてくれたお礼にヒントをあげる

わ。オネイロス、ヒュプノスを調べなさい。調べたらきっと、さつき一緒にいた犬が導いてくれるわ。正しき輪を描けばね」

「どうも」

俺は礼を言うと、さつき吹っ飛ばされたただでかすり傷だらけになった体を動かし、眠

らす方法を考える。その間にもラミアは勢いよくヤリをつき、地を揺らし足を巧みに止めてくる。何十回も避けているヤリがとうとう左肩に突き刺さる。やたら現実的だと思っていたが、ここまでの痛みを味わったことがなく、意識が飛びそうになる。

「チツ。いてーな」

俺はこのままだと夢の世界で殺されそのまま現実の世界でも殺される錯覚を覚えた。

「やる」か「やられるか」の状況で甘いことを言っていた自分が急にバカバカしくなってくる。コイツは俺の存在を全力で消そうとしてくる。それならやさしく帰そうとしている自分が滑稽に見えてきた。

俺は覚悟を決めた。

意識を飛ばして眠らせてやる……。そのまま安らかに眠らせて帰ってもらおうと……。

「覚悟を決めたようね。気配でわかるわ。でも遅いわよ」

ラミアはそう言いながら槍で俺を突いてくる。

俺はとつさに横に転がり崩れた地面から石を取り出し、それを別の方向へ投げる。ラミ

アは石が地についた音を聞きそこへ槍をさす。当然、そこには誰もいないから攻撃は外れ、

その間に俺はラミアに突っ込み自分の背の倍以上のジャンプをする。剣を巨大なフライパ

ンに代えて両手で持ち、硬式テニスの要領でラミアのアゴへ下からファアハンドの感じで打つ。

ラミアはさすがに顔があがり脳が揺れたのかグラつく。そこへ下から振り上げた腕を片

手に持ち替え、初弾で捻じれた体をクルリと一回転させ、腕を勢よく振り降ろしスマツシユを顔面に打ち込む。

そのままラムリアは倒れ込んだ。俺はラムリアの顔を除くと、気持ちよさそうに気を失っていた。

「これでしたら眠れるだろ」

そうラムリアに声をかけるとフォンスと親子がやってきた。

「ありがとうございます」

「礼にはおよびませんよ。良かったな君」

俺は母親の陰に隠れていた小さい男に話しかけた。

「この恥ずかしがり屋なんです。馭^{かける}、向こうでワンちゃんと遊んできなさい」

そついうと馭と呼ばれた少年はフォンスの方へ走って行った。

「実はあの子は私の子じゃないんです。でも、これで化け物に襲われている時に実の子

じゃなくても、とても大切に思えました。本当にありがとうございます」

脈絡もなく急にそんなことを言われても俺は困るのだが、大切に思ってくれたことはい

いことであるので、余計なこととは言わずに頷いた。

馭君に追いかけられているフォンスがこっちに走ってくる。

「コイツ小さい子供とかダメなんです。散歩してて寄ってくると逃げ出すくらいに」

俺はそついうと袋から爆竹を取り出し、同じ轍を踏まないようにすぐに爆竹に火をつけ、

夢の世界とおさらばした。

「いッてエエエ」

竜崎は肩と腕にとてつもない痛みを感じ思わず声をあげた。夢で擦り傷ができ、肩を貫

かれた箇所痛みがある。なぜか、全身にあつた擦り傷のうち左腕だけに痛みを感じる。

彼は夢で起きたことがなぜ現実に影響しているのか理解ができなかった。そういえば、な

ぜ逆に夢で起きたことが竜崎の現実に影響しないのかもよくわかっていなかった。

とりあず、と彼は痛みをこらえ腕に机の中にしまつてあつた包帯を巻く。制服はまだ冬

服のために半袖にはならないから学校でもごまかせ、家でも脱がなければわからない。

今朝は右手だけで散歩に行き、朝食をとる時なるべく左腕を使わないようにした。学

校へ行つても徹底して隠し通すつもりであつた。

学校へ行くと、土曜日に一緒に遊んだ藤咲がいつもと同じような態度であることに竜崎

はホッとした。これでお礼もされたし、きっと何もなかったことになるから他の男子から

追いかけられることもない。きっと、土曜日の様子がおかしかっただけだ。

竜崎はそう思い、いつも通り授業で眠ることに決めた。だが、今日は左腕の痛みが時間

を追うごとにひどくなり、眠れないし顔が青くなっていく。

「おいおい、いつもより体調悪そうだけど大丈夫か」

加藤が竜崎へ心配して声をかけた。

「いつも俺は体調が悪そうなのか？」

竜崎がまともな答えを言わなかったから、いつも通りだなと加藤

は感じた。

昼休みになり竜崎は一人になりたくてどこかへ消えようとし、下駄箱まで行き中を覗く

と、一枚の紙を見かけた。そこには大至急という言葉と携帯の番号が書いてあった。

とりあえず、電話をかけてみると聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「もしもし、竜崎さん？」

「藤咲の妹か。何の用だ」

しばらく、話につき合うことにした、竜崎は黙って話を聞く。

「それで夜な夜な眠ったまま母親が歩き出すと？」

「はい。そうなんです。お姉ちゃんは気づいてないみたいだし、相談しても不安にさせ

るだけなので竜崎さんに相談しようかと思ったんです」

「んー、とりあえず、お母さんに聞いてみないとわからないな」

竜崎は思案する顔になると、どこへ呼び出すのか、又はどうやって店にきてもらうのか

を考え始めた。その様子を感じたのか花桜梨はこんなことを言い始めた。

「ウチの家にくればいいんですよ」

彼女は姉妹の立ち位置をわかっていないらしい。そんなことをして学校の誰かに目撃さ

れたら自分の存在が消されてしまう、と竜崎は思いそのまま口にした。

「それなら、心配しなくていいですよ。変装してくればいいんですよ。じゃあ変装グッズ

を用意しますから。後で置き場所を教えますから」

なぜ、変装道具を花桜梨が用意するのか竜崎にはわからなかったが、利用できるものなら利用しようと思った。

「それでいつがいいんだ？」

「なるべく早くがいいです。今日はダメですか？」

「ちよつと寄るところがあるから、それからでいいのなら」

「じゃあ今日で。それから土曜日はお姉ちゃんと楽しみましたか？」

竜崎は「なぜお前がそれを知ってる」と即座に言いそうになるのをこらえた。

「ん？　どういうこと？」

「お姉ちゃんが人と会うのにオシャレしてたので珍しいなっと思つて。普段は人と会つ

ても最低限の恰好しかないんです。それで竜崎さんと会うのかなつて。家で誰と撮つた

のかわからないプリクラ見てはしゃいでたし」

アイツはそんなに土曜日はおかしかったのかと竜崎は思い心配になった。逆に妹と一緒に

にいた男のことを聞き返してやりたくなるが墓穴を掘るのが目に見えてわかるので竜崎は聞くのをやめた。

とりあえず、予定だけをたてて電話をきつた。

学校が終わり、俺は店長に聞きたいことがあつたからバイト先へ急いだ。店の正面は開

いていないので従業員用の入り口からはいると、店長の柳林が寝ていた。

「おう、どうした？　今日は休みのはずだぞ」

「店長、ちよつとおかしいんです」

俺はケガのことや門のこと、それにラミアが言っていたことを話した。

「まさか、最初に僕と会つた時に拾つた石をまた拾ってないだらうな？」

店長はいつになく真剣な目をして聞いてきた。

「えっと、透明な石ですよね？ それなら2つほど拾いました」

柳林はそれを聞くと深くため息をつき、俺からどういつ時に拾ったのかを聞くと、事の

重大さを説明してきた。

「えっと、何から話せばいいのやら。まず、夢と現実について話そうか。夢と現実の世

界をつなぐのはなんだ？」

「つなぐというか、夢を見るときは眠ってないとみれませんよね？」

俺は自分が関わっている夢の方だと思い回答をした。

「そうだが、それは1つの側面でしかない。もともと人の夢には2つある。1つ目は将

来コレになりたいとか何かをしたいという欲求だな。竜崎にも何かあるかい？」

「世界平和と皆が笑顔で暮らす世界にしたい」

「お前は本当に高校生か？ 出家から帰ってきた人みたいだぞ」

「そう答えとけば、教師にもタメにも万能なんです。深くは突っ込まれないし、タメに

は笑いすら取れる」

「そうか。まあいいや」

そついうと店長はお茶を一口飲んだ。

俺にはお茶どころか椅子すら用意してくれない。

「子供の頃にスポーツ選手に憧れて夢を見るのはそれだ。これが起きていても見られる

現実の夢。そしてもう1つが俺たちに影響をしている方だ」

「それが寝ているときに見る夢ですか」

「そうだけど、実はシンプルにはいかないんだ。こうしたい、こうなりたいっていう欲

求がたまると寝ている時に夢をみる。深層心理という話をきいたこ

とはあるか？」

「占いが好きなと女子と少しだけその話をしました」

「それに近い。例えば、Aさんの夢がある人から逃げている夢であつた時、その人から

心理的に鎖のようなもので縛られて逃げられない状態であることが多い。その鎖を僕らが断ち切る」

「それは普段やっていることですね」

「そうだよ。それが2つ目の夢。これにはもう少し、深い話があるんだ。ラミアが言っ

ていた2つの名前と扉。これが話に出てくるのはこれからなんだ」
やっと気になっていた話題になり相づちをうつ。

「コンコン」

「君はまさか、あいづちを打つを音で表現したわけじゃないよね？」

「はい？」

最近使い始めて誰もわからなかったのになぜ、この店長はすぐにわかったのか不思議で

しょうがなかった。ネタがわかるまでは、誰もわからないだろうと少し自慢げに使って

いたが、急に恥ずかしくなってきた。

「あいづちを相槌って漢字で書いて、槌というのは建築工具で簡単にいうと木製のハン

マーだろ。それを打つとコンコンとなるんだろ。君は真面目な話をしている時にまったく」

店長はそういうとさっきよりも深くため息をついてしまった。

「それより、本題に入りましょう」

俺はこれ以上痛いことにならないように話をそらす。

「長々と話をしようとしたけど、やめた。またコンコンとか狐みたいなことを言われた

ら反応に困るからね。カバンについているそのキツネのストラップでも使って、もう一回言うのかい？」

もう何もかもバレて「何でわかったんですか」と聞く気になれなかった。

「君の拾った石はおそらく、オネイロスの3つの神石だ。しんせき オネイロスは、モルペウス、

パンタソス、ポベトル別の名をイケロスという3つの神の総称だ。モルペウスは人の形や

声色を真似る。パンタソスは木や石などの無生物を真似ねる。イケロスは獣や鳥を真似る。

これはヒュノプスっていう眠りの神の封印石にもなっているんだ」店長の話をそこまで聞いたが、俺にはまだよくわからなかった。

「それと今まで無関係であった、俺が夢でケガして現実に影響したと関係あるんですか？」

「そこだよ。本題になるのはね。このヒュノプスは奥深い洞窟の先に眠っているんだけど、3つの封印石がなくなると棺が開き目覚めてしまう。おそらく、これから夢遊病の人が大量に出てくるだろう」

「そういえば、今日はこれから夢遊病の人に話を聞く機会が持てそうなんです」

「それはちょうど良かった。これを首輪につけなさい。棺のある洞窟へいけるから」

そういうと金庫から犬の首輪を取り出し、俺に渡してきた。

「店長も洞窟に行きましようよ」

「僕はもうたぶん無理だよ。いい年こいた大人になっちゃって想像力が衰えてるからね。」

それに石は君が関係している夢に出ているだろう。自分で解決しな

いとね」

この店長、都合のいいこと言って逃げる気満々であるのがハッキリとわかった。

「それと最後に扉とはどういう関係が？」

「それはね、ヒュノプスが扉を開ける儀式をしているからだと思うよ。その扉はハッキリ

りいつてあけさせるとまずい事になる。君が戦った以上の怪物がこの世界に出てくる。夢

遊病の人を使って扉をあけさせ、そのまま現実と夢の世界へのゲートをつくり、夢と現実

がハッキリしない世界にしてしまう。何でもアリの世界になって、めちゃくちゃになるこ

とは間違いない」

俺はその話を聞いて何かの冗談かと思ったが、ケガのことを考えると冗談には聞こえない

かった。それにこの店長は茶化するときとそうじゃない場合の区別はついている。

「ラミアの地震が妙にリアルに感じたのはそのせいだったんですかね？」

「おそらく、そうだろう。現実と夢が近くなってしまっているんだろう。だから、早め

に手を打たないと大変なことになるよ」

店長の話を聞くと、携帯が鳴った。

「もしもし。わかった、今から行く」

「ま、気を付けて行ってらっしゃい。傷はそっちの世界で治してきなよ。治療しないで

こっちに来るとまた痛むから。昨日よりも痛み場所は増えるはずだから」

話が終わった店長からすぐに効くらしい痛み止めをもらい、俺は店を後にする。

夢と現実の狭間でもがく少年

第五章 夢と現実の狭間でもがく少年

1

普通の家と何も変わらない家の前で遊園地にいるような着ぐるみを着ている少年がいた。

これを着るぐらいならそのまま来ても良かったと思うが、その衣装が入っていた袋にはメ

モ用紙みたいのもセットで置かれていた。それには『これを着てください。これで変装も

バッチリですね。せっかく用意したので着てこなかったら不審者で警察に通報します』と

書かれていた。彼は仕方なく、行き先の民家の隣にある近くの公園のトイレで着替え、家の

インターフォンを鳴らした。

「竜崎です。花桜梨さんいらっしゃいますか？」

カメラがついているので、中では笑い声が聞こえてくる。

「いませんよー。サヨウナラ」

そう言われるとブチッと切られてしまった。

家の前に立つ彼は携帯を片手にもう一度鳴らした。鳴らしながら携帯をかけると、イン

ターフォンの向こうと同じ声が聞こえる。

「おーい、どういことだい？ 人にこんな恰好をさせて、あからさまな居留守を使うとは？」

彼はあまりの仕打ちに眉間にしわを寄せていた。

「すみません。今でたのは母なんです」

そういうと、中から一個下の少女が出てきて招きいれた。後ろでは少女の母親らしき、白人の背の高い女性が立っていた。まだ彼の方を見て腹を抱えて笑っている。

「こんにちは。花桜梨さんの知人の竜崎広界といいます。今日はお話を聞きたくてお伺いしました」

「はい、話は聞いています。中へどうぞ」

「失礼します」

そういうと彼は中に入り、リビングへ案内され、藤咲家のお母さんが笑いをこらえるように台所へ行ったのを確認してから花桜梨に話しかけた。

「これはヒドすぎないか？」

脱いだコレを指さし竜崎は彼女へ話しかける。

「だって、普通の服じゃ面白くないんだもん」

「だからって、カバが逆立ちしている着ぐるはないだろ。さすがにさ」

「手元にあるのがそれしかなくて。バカみたいで面白いじゃないですか」

「そもそも何でこんな着ぐるみ持ってたんだよ」

彼はそういうと、藤咲の母親が紅茶とクッキーを持ってくるのが見えたので話をやめ、

さっそく本題へ入ろうと話を進めた。

「では、さっそくですがいいですか？」

「その前に聞きたいことがあります」

「なんでしょうか？」

竜崎は淹れてくれた紅茶に口をつけ、質問を促した。

「娘の花桜梨とはどこまでいつてるんですか？」

「ちよっとお母さん何聞いてんの！？」

竜崎の隣で聞いていた、花桜梨が紅茶を吹きこながらそう答えた。

「いつてるといふのはどういうことでしょうか？」

「食事に行ったりであつたり、手をつないだりとかです。それ以上のことであつたら、

この場であなたは死にます」

「それ以上もなにも一回呼び出されてファミレスで話をしたり、後はバイト先にきたの

で少し話しただけでそれだけですよ」

語尾はきつと言葉を間違えたんだろうと、考えた竜崎は丁寧にそう答えると紅茶をテーブルに戻し、クッキーに手をつけた。

「そうだよお母さん。竜崎さんはお姉ちゃんと同じクラスでそれもある、お姉ちゃんと一緒に一度だけ会っただけなんだよ」

「そうなんです。てつきり勘違いしてしまいました。では、そのクッキーは絶対に食べてはいけませんよ」

そういうと、藤咲の母は竜崎の手からクッキーを取り上げ、台所へ新しいクッキーを取りにいった。竜崎はその様子を不思議な目で見ていた。

「さつきは毒いりクッキーを食べさせようとすみませんでした」

竜崎はその声が聞こえた先の隣の花桜梨の顔をみると、額に手をあて溜め息をついてい

る。竜崎は顔を引きつらせ青くなる顔で戻ってくる藤咲の母親へ視線を戻し、目が合うと

苦笑いをするしかなかった。

竜崎は母親が座ると本題に入る。

「それで夢を見て歩き回っている感覚みたいのはありましたか？」

「いいえ、ないんです。白い羽が一枚舞っていた以外、夢のことは何も覚えてなくて」

本当に思いだせないらしく、それ以降は夢の話から遠ざかってい

き、藤咲姉妹の思い出

話になっていった。竜崎は人が夢を見ても思いだせないことが多々あり、仕方がないこと

をわかつていたのでお母さんの話に付き合っていた。

「竜崎君は聞き上手ね、つい話しちゃうわ」

「ありがとうございます。バイトとはいえ、今の仕事で必要なので上手になるしかありませんから」

「ただいまー。誰か来てるの？」

ドアが開き、聞き覚えのある声が竜崎の耳に入ってきた。竜崎は本能的に窓から逃げよ

うと立ちあがると、先に声をかけられてしまった。

「アンタ、何でここにいるのよ！」

竜崎の顔を見るなり顔が赤くなった誇紫が聞いてきた。

「やあ。またお前の妹に依頼されちゃった」

竜崎はそう答えるのがいっぱいばいばいで恐ろしさのあまり、母親の顔が見られなかつ

た。竜崎は実際に何もしていないのだが、なぜか身の危険は感じていた。

「アンタ、学校でも顔が青かったけど大丈夫なの？」

「おかしいな。さっきまで青くなかったのにな」

竜崎は「今、青いのはお前の親のせいだ」と言いそうになったが、それをいうとおそら

くこの家から生きて出られなくなるのは確定であった。

「竜崎さん、体調悪かったんですか？」

「いや、いつも通りだ」

竜崎は花桜梨に一言かえし、誇紫に顔を向けた。

「それより顔赤いぞ。熱でもあるのか？ 土曜日も様子がおかしかったし」

「大丈夫よ。土曜日も別におかしくはなかったわよ。早く帰りなさいよ」

そついうと誇紫は怒りながら二階へ上がって行った。

「ふーん。やっぱりお姉ちゃんと会ってたんだー」

花桜梨は竜崎をジーっと見つめた。

「いや、この前のお礼をしたいって言われたから付きあっただけだ」

「お礼で娘と突き合った!？」

なぜか、母親顔を真つ赤にしていたが、藤咲妹同様どこかおかしいのか、日本語に難が

あるらしく、竜崎はやんわりと違んですよ、ということを示さなければますます立場が悪くなるのがわかっていた。

「この前妹がお世話になりましたって感じで、わざわざ遊園地のチケットをくれたんだ。

俺のことが嫌いなのにわざわざ一日使ったんだぞ。誇紫に感謝しろよ」

それを聞くと花桜梨はタメ息をつき、首を振っていた。

「帰れって言われたのでおとなしく帰りますね。それじゃあ、今日はゆっくり休んでくださいね」

そついうとカバンを持って帰ろうとする竜崎をお母さんと花桜梨が玄関まで送りに来た。

「これ、最後の一個だから食べて行きなさい」

あからさまにポケットから出したやつだったので、竜崎は腹いっぱいですと断り家を後にした。

「あれ、竜崎は？」

部屋着とは思えない服を着て階段を降りてくる誇紫を見て花桜梨は呆れてしまった。

「お姉ちゃんも素直じゃないね」

「やっぱりあの子のために最初に盛つとくべきだったわね」

「最初のクッキーで仕留めちゃうと、話がわからなかったわよ」

「何の話をしてるの？」

「こつちの話！」

花桜梨はそういうと、母親と二人でゴニョゴニョ話し始めた。

かつてに立たされた死の門の前から生還した竜崎は犬の散歩に行き、腕の感覚を確かめ薬が効いていることを実感した。そして夜がふけ、布団に入る前へフォンスの首輪をつけかえ、今まで店長につきあわされたことを思いだしていた。そのうちに彼は深い眠りについていた。

2

俺はいつになく眠い目をこすり、起きるとそこは辺りが真っ暗であつた。ここが話に出てきた奥深い洞窟なのだろうか。いつもこの世界では一緒にいる動物の気配がなく、さすがに逃げ出したのだろうか。俺にも危険な香りが漂ってくるほどだから犬であるアイツが怯えないわけがない。

なんとか明かりをつけようとまつあきを召喚する。片手にまつあきを装着し、直感的にただならぬ気配がする方へ歩いて行く。中に進むに連れて圧迫感が増し、俺は息苦しさを感じた。RPGのダンジョンみたいに入り組んで複雑にはなってい

ないのが救いだ。

「あ、宝箱ゲット」

俺は道に落ちていた箱を開けた。

中から破裂音と共に黒煙が上がる。

箱の横の水たまりには黒くなっている顔が映った。

それを見て無言で顔を拭き先へ急ぐ。

ヒュプノスという眠りの神はどういう姿なのだろうか。棺に封印されていたぐらいだから

らまともな神ではないのだろうと察しはつく。

「まだ着かないのかよ」

俺は歩きながらボヤくと遠くから女の叫び声が聞こえてくる。誰かがこの先に行っているらしい。

少しペースを上げると洞窟の先にある光に満ちた古代神殿のような場所にたどり着く。

そこは金銀の財宝はなく、代わりに白い石膏の像がいくつか飾ってあるだけであつた。

「またせたな！」

俺はすぐに目についたフォンスへかつこつけ声をかけた。

「お疲れ様でした」

その場にいたもう一人を見かけて俺は立ち去ろうとする。

「それ、この前みたわよ」

「何でよりによってお前がいるんだよ」

「知らないわよ」

「どういうことだ、フォンス」

「わからないよ。広界の匂いがしたから来てみたらこの子が居たんだよ」

「何でコイツから俺の匂いがするんだ？」

「私はそんな匂いしません！」

「特に右ポケットから匂いがするんだよ」

そう言われ藤咲はポケットに手を入れるとどこかで見たハンカチを取り出した。

「それ俺のハンカチだ」

「その……ありがとう」

そういうと横を向きながら俺に返してきた。

「横を見ながら返すってなんなんだよ。目を見て返せよ」

俺が言くと藤咲は顔が真っ赤になり、小声で返してきた。

「子供じゃないんだから注意されたぐらいで顔を真っ赤にして怒るなよ」

「ちがうもん」

藤咲はやはり怒っているようだ。

「そこでラブコメやらないでくれないかな」

「誰だアンタは」

俺は直球で聞いた。

「ココは俺の洞窟。わかる？ 早い話が俺の住処」

「じゃあ、アンタがヒュノプスか？」

そういうと全身を見たが少し背が高いだけの男にしか見えなかった。ある一点を覗いて。

「そうだ」

そういうと彼は背中に生えた羽を一回はばたかせた。羽が生えてるのがいかにも神話の世界のような感じである。

「しっかり黒いパンツは履いてるんだな」

「そりゃ全裸で出る前にはいかないだろ」

そういうと、右頬が赤いのを赤くなってるのが目に入った。

「この女に全裸が理由でひっぱ叩かれただろ？」

「なぜわかる」

「俺には全てがわかる。アンタが何をやろうとしているのかもね」
俺はそういうと棺に目をやるとやはり蓋が開いている。

「ザッキ―嘘ついてる」

「なぜわかる」

「嘘ついてると後ろ髪をイジる癖があるもん」

「そうかい」

「え？　ずっと気づいてなかったの？　わかっててやってるんだ
と思ってたよ」

フォンスが間に口をはさむ。

「うるせー。尻尾をギュッと掴んで逆さまにするぞ」

「それだけはやめてよ！」

フォンスは首を振って嫌がっている。もともとやるきなんて全く
なかったんだけどね。

「それは本気でいつてるじゃない。髪触ってないし」

藤咲が余計な事を言ってくる。

俺は面倒なので聞き流し、ヒュノプスと対峙した。

「お前がラミアを扉の向こうに返したという人間か？」

「そうだ」

「そうか。貴様には永遠の眠りをくれてやろう。この女のように
指さされた方向を見ると藤咲のおばさんが目に入る。」

「ママ！」

藤咲は叫んで近寄ろうとするが俺は手で道を阻む。

「待て。俺がすべて終わらせてやるからこのまつあきを持つてる
んだ」

俺はそういうと一歩前へまつあきを藤咲に渡し剣を空間から出す。

「これ、たいまつだよな？　まつあきって何？　漢字で書いたの
がよめなかったの？」

「ちよつと松明^{たいまつ}に名前を付けてみたかったただけだ。ちなみにこの
ゴムみたいな輪にも名

前があるぞ。フォンスちよつとこい」

「はい」

俺はフォンスを呼び、足に腕輪を付ける。

「これは巨大化の輪だ。体の大きさはフォンスの意志で決められ

る。合図するまでこ

で待つんだぞ。コイツが藤咲が前に行きそうになったら噛んでいいから止めるよ」

「わかったよ」

フォンスはそういうと藤咲の隣にしっかり座っている。それを確認してからさらに一歩前へ出る。

「さて始めますか」

「その前に聞きたい。お前はなぜ私の所へ来た」
ヒュノプスは問いかけてきた。

「何でかな。身近で人が傷つくのも見たくないからかな。一步の勇氣と親切さで人生が変わることもあるし」

そういうと、数年前の出来事を思い出す。あれがすべての始まりであつた。

「そうか。じゃあ私を倒さなければ、夢が現実に影響を与えることも知っているのだな？」

ヒュノプスは俺が知っていることを前提に聞いてきたのであろう。「人の強い想いが夢になる。それが現実の世界に繋がって世界的な発見に繋がったりす

るんだ。良い方であれば何もしないが、悪い方であれば干渉させてもらう。人が面倒なこと

とになってその面倒なことが俺の所に面倒な形で回って面倒なことに巻き込まれるのは嫌なんですね」

そこまでいうと俺はヒュノプスの目をジッと見据える。ハッキリ言つて怖くて目を合わ

せたくはなかったが、自分が止めないといけないのをわかっていた。

「そうか。そこまでいうのなら何も言うまい」

「逆に聞きたい。もう一度おとなしく眠る気はないか？」

「私を満足させたら眠ってやろう。封印石もお前がすべて持っているようだしな」

「3つのうち2つしかないぞ」

「充分だ。石は2つでも問題ない。そこにある台座のくぼみに石をハメれば自動的に私は眠りつく」

「そうか」

そういうとしばらくお互い構えあつたまま動かない。正確にいうと俺の方は動けなかった。ヒュノプスが手のひらを俺に向けると翼を動かす。

俺は手をかざしてきた理由を少し考える。どんなことをしてくるのか予想が付かない。

この数秒の間にヒュノプスは、このぽっかりとした空間で翼を動かすと突風が吹き荒れ、

俺達を吹き飛ばしにかかってきた。

その凄まじい突風を地面に剣を刺して堪えると相手を見据え、やつが涼しい顔をしてや

がるのを確認し舌打ちをする。

「フォンス、キャッチは？」

「してるよ。この人も無事だよ」

口で加えられた藤咲を見て安心する。

「そのまま背中に乗せろ。後はわかるな？」

「逃げるんでしょ？」

「そうだ。わかってるじゃないか。名犬」

「ちよつと、お母さんは？」

「大丈夫。広界がうまくやるよ」

「そうだ。俺がうまくやるからとつと早く逃げろ。そこに居ても邪魔になるだけだ」

「ふん。二人はさすがに助けられないとみて、若いほうだけここから逃がそうというこ

とか。賢い判断だ」

「誰が賢いだって？ お前の言うことが賢いのなら俺が考えていることは賢くはない」

「さようか。できないことは言うべきでないぞ。女の前では特にな」

「ほつとけ」

俺は言い終わるか終えないかのタイミングで切りかかる。

フィについて風の速さで斬りかかるが、避けられ翼にキズをつけるだけで精一杯でまと

もに体にヒットさせるのは骨が折れそうである。

「ごさかしい」

「神話に出てくるクラスの怪物相手に卑怯もクソあるか」

「君はサバイバル気分で秘境ピクニックに行くのかい？ ま、自分の力を過信しないのは褒めてやろう」

「ここに来る以上のサバイバル気分を味わえることなんてあるのかい？」

俺は話しながら絶対にヒキョウを間違えていると思いつつも隙を探る。ヒュノプスは

単に腕を組み立っているだけなのだが、威圧感で前に進みにくい。

さつきみたいにフィを

ついて攻撃することはもう難しいだろう。

攻撃に移ろうとしたのか、少し腕が下がったのを俺は見逃さず突っ込む。風に背中から

吹き飛ばされる要領でブリッジのような小さい弧を描き、ヒュノプスの頭上の辺りから水

平に斬り首を狩りに行く。だが、首狩り族のように上手くいくわけもなく、サツと前へ瞬

間的に移動したヒュノプスに腹への強烈な一撃を許してしまう。俺の腹は九の字にまがり、

吹き飛びかけた。攻撃したはずのヒュノプスの手が赤い液体が流れる。

「ふう。腹に鉄板を入れてなかったら危なかった」

「鉄板を殴って血が流れるわけなかるう。トゲなぞ仕込みおって卑怯だぞ」

ヒュノプスは血を舌で舐めながら睨みつけてきた。

「いや、俺側にしてみたら鉄板だぜ」

俺はそういうと、腹側は鉄板になっているものを見せた。

「盆栽に使うハリ山の剣山が仕込んであんじゃねえか」

ヒュノプスは指を指し、なぜか怒っている。

「自分の実力はわかってるもんでね。できることとできないことの区別は付けてるつも

りだし、実力以上の面倒なことを押し付けられても困るんでね」

俺はそういうと、すつと後ろに下がり距離とる。

「貴様には苦しみを与えてやろう」

ヒュノプスは翼で地に立ったまま羽ばたくと無数の羽が飛んでくる。俺はそれを右手の

中指と親指を擦りパチツと音を鳴らすと炎を出し、すべてを燃やした。

「アチツ！」

今までなら熱さを感じることがなかったが、夢と現実が近いせいかリアルに痛覚へもろ

に響く。一瞬ではあるが隙を見せるとヒュノプスは突進してくる。

俺はとっさに人指し指

の爪を親指ではじき、その指の先に電気の短剣みたいのをおこすとマッチョな天使は突

き刺されると思ったのか突進をやめた。幸い電気は発生すると指からすぐに離れたので感

電はしない。

「芸が細かいな。ただ、いつまで持つかな？」

「誰がゲイじゃ。俺は女の方がいいわ」

俺は自分がゲイだと言われたのだと思い否定し藤咲を見ると額に手をあて溜め息をついている。

「あんたボケてんじゃないの」

そう言われ、俺はヒュノプスへの視線を戻すと奴は声をかけていた藤咲の方を見ている。

隙を予定通り作れたので、再びおれは風にのり斬りかかる。今度は確実にとらえた。

斬りつけられてもとっさに反撃してくるヒュノプスの攻撃をかわし後ろに下がる。

「この私の顔に傷をつけるとわな。ひとすじとはいえ見事だ。だが、貴様はこれだけ以上は私に当てることができない」

ヒュノプスはそういうと、一直線に傷がはいった頬から出る血を手の甲で拭うと舌で舐

め始める。そして手に杖を生み出し地面に突き刺すと、杖の先の髑ど體から火が出てくる。

それを俺は横にロールをして避けると避けた先にヒュノプスが待っている。俺は勢いよく

足で腹を踏みつけられ、そのあと首に足を乗せられてしまい身動きが取れなくなる。

「こうかい。やっといたよ」

「よくやった」

辛うじて視野に入るだけの位置にいるフォンス達に目をやる。

俺はフォンスの口元に藤咲のおばさんを確認すると、持っていた剣で注意が散漫し始め

ているであろうヒュノプスの足元を刈ると足首にもう一筋の傷ができた。その瞬間に体と首をねじり俺は逃げる。

ヒュノプスは怒りで興奮し始めたのか、杖を上に掲げ雷を落としてくる。避けたはずなのに雷が直撃した俺は感電死することはなかったものの少しアゴの辺りが痺れ、剣や鉄板を空間にしまふ。避雷針になることをさけるためだ。

それを確認するとヒュノプスは腹に強烈な一撃をお見舞いしてくる。体がくの字に曲がり5mは吹っ飛ぶと全身に擦り傷ができみぞおちに入ったパンチが痛む。殴られる瞬間に息を吐きクリーンヒットはしなかったが、人を覆っている表面の皮が痛い。

「ザツキー！」

俺はそう呼ばれ立ち上がる。

今度は俺の番とばかりに京都のお土産屋で見かけた木刀をだし殴りかかる。俺は杖を少し上に持ち上げ火をだそうとするのを確認してから手元から穴あきの家庭用のガスボンベを出す。そのままガスボンベに引火してドカーンだ、とシナリオを頭に描いていたが、残念ながら夢と現実が近すぎて痛覚がするどすぎるのでできないことに気が付く。

痛覚がするどくなくてもヤバイ気はするが……。

それならこれに対応すればいいと、考える。

「燃えてるかなー？」

俺はガスボンベを手元から少し離し、中で火から逃れられる空間を持った巨大な鍋を出し隠れる。鍋はやはり火を通すから中はそこそこ熱かった。

外を眺めると体中が焦げたような人が立っていた。髪がモジャモジャになり、口を開けるとから煙を出すところを睨みつけてくる。瞳の奥にドス黒いオ

ーラを感じる。

「何デ生キテルンデスカ？」

俺は少し声を震わせながら言う。

「くそボケがああああああああ」

ヒュノプスは初めの理性的な印象が崩れるぐらいの罵声を浴びせ、鍋から顔を出す俺を鍋ごと蹴り飛ばした。

俺は壁まで吹っ飛ばされ、意識がなくなりそうになる。壁にはヒビが入り、人型に凹んでいるのを見たのは壁から抜け出した後である。早くケリをつけなさいといけないが台座にすらたどり着けてない。

蹴り飛ばした本人のヒュノプスがゆっくりと王者になった様な歩みをしてくる。俺は弓矢をサツとだし、店長にやらされたアーチェリーの要領で打ちこむ。奴は体をねじり歩みを止めずに歩いてくる。

「1本でダメなら2本。2本でだめなら3本。3本でもダメなら4本。4本でダメなら諦める」

俺はそう言いながら10本近くの矢を放つ。目が慣れてきたのか、段々とギリギリで避けるようになってくる。

さらにもう5本打つと避けずに手で矢を掴む。そして歩みが遅くなってくるのが目に見えてわかる。

俺は最初と同じようにヒュノプスに風速で突進し殴りかかる。

「今度はヒットしたぜ」

俺はそういうと顔を殴った拳を見つめニヤリと笑みをつくる。ヒュノプスに対して、不敵な笑みをつくると俺はすぐに殴り返された。だが、前ほどは

痛くはない。

「やっと効いてきたようだ。お前ゾウでも10秒程で倒れる毒をくらってるのに平気な

顔をしてやがったんだよ。顔の傷とかから入ってるはずのに」

そう、俺はまともに相手をして勝てないから毒を盛っていた。

剣山に剣に、これでも

効かなかったら直接口に入れてやるつもりだった。

ヒュノプスからの反応がない。やっと意識が朦朧しているのだろうか。フラフラと歩き

回っている。そこへ俺は鋼の槍を取り出し腹へ突き刺す。そのまま俺は追撃を辞めこのチ

ヤンスを見逃すまいと、台座に向かい封印石の窪みに1つハメた。

そうすると地面がガタガタと音をならし泣いているようであった。

ヒュノプス腹に槍が

刺さったまま、まるでさまよい歩いているかのような歩み変わった。2個目をハメる揺れ

が大きくなり、ヒュノプスが少しずつ棺に帰って行く。

ヒュノプスの手にある杖に目をやるとドクロが何かをつぶやいているようである。それ

を見つめていると俺の足元が崩れ始める。

「ザッキー!!!」

「広界!!!」

俺は一人と一匹の悲鳴を聞きながら崩れていく岩をゲームの要領でポンポン跳ねて行く。

「早くここから出る」

上に這い上がるとそういう。

一人と一匹がまた何か叫び声をあげている。さっきより崩れる音が大きくなり何を言っているのか聞こえない。

俺は何を言っているのかわからないため近づいて行く。そこで俺

はヒュノプスに朦朧と
する中で放り投げられた杖が背中を貫く。

「ザツキー!!!」

私はそう叫ぶのが精いっぱいだった。ザツキーの背中から禍々しい不気味な杖の先が見える。周りは真っ赤になっていく。拙い言葉でしか表せないぐらいの状況になっていくのがわかる。

「フォンス君。ママは私がこの袋に入れるからザツキーを助けてあげて！」

「わかったよ。はい」

そういうとフォンス君は首を舌から上へ振り上げママを上へ放り投げると私の手元に収

まる。私はそのまま首の所にある袋に入れる。

「急いで」

私はそう急かすと揺れる背中を両手で必死につかむ。

ザツキーを口にくわえてフォンス君は洞窟から脱出をしようとす

る。
行きとは違い、崩れかけているから新しく道ができています。

「血で鼻が利かないから広界を持ってて」

そういうとフォンス君は一回止まり、私を降ろす。私はすぐにザツキーを乗せる。

「ザツキー！ ザツキー！ 死んじゃ嫌だよ。ザツキー」

私はそういうと頬へ涙が滴る、ポロポロと流れて行く。

「ザツキー！」

私は言葉を発すると体が段々と薄くなっていく。それはまるで体が暖かくなる感じ。フ

ワフワとしたと思うと急に重くなる。これから先を思うと気が重くなるほどに……

竜崎は目を覚ますと全身の痛みで声をあげそうになるのを必死でこらえた。竜崎は左腕

に管が刺さっているのを確認し、状況をうつすらと把握する。

ここは病院なのかと。

俺は付けられた呼吸器をかってに外し少し思い出す。

なぜ、ここにいるのか。

藤咲とフォンスの叫び声がし、背中から杖が胸を貫いたのは夢の話であるはずだ。夢と

現実の世界が近くなっても、ヒュノプスを封印すれば済む問題であるはずだ。それに最後が思い出せない。

結局どうなったのかもわからない。どうなっているんだ。

それに少し腹が痛む。俺は腹を触るとガーゼの上に包帯が巻いてある。

意味がわからない。

俺は何も言うわけにもいかないが、とりあえず、目が覚めたからナースコールを押す。

看護師さんがやってくると俺は状況を聞いた。

母さんが夕方まできていたこと。

若い女の子が見舞いにきたこと。

そして自分が3日間眠り続けていたこと。

どうやら腹の包帯は寝たまま外へ歩いて行き、近くの廃墟の鉄骨に転んだ事になってい
るらしい。

聞いたときは思わず、嘘付けと反射的に言いそうになったが、そ

ういうことにしておい

た方が都合が良さそうに見えたからあわてて口をつぐむ。

実際に夢遊病の患者が近隣でなぜか大量に発生し、その廃墟に集まっていたらしいから

辻褄は合う。

「妹さんきれいですね」

看護師さんがいう若い女の子は妹だったのか。カトケンといい、何で素直にそう言わないのか、俺にはわからないことだらけだ。

そこでノックの音がする。

「ちよつと待ってくださいーい。きれいな人がきたんじゃないですか」

「あ、そうですか」

「彼女ですか？」

「妹と付きあつたら犯罪でしょ」

俺はそういうと笑いながら看護師さんが出て行くのを待つ。

看護師がドアを開け出て行く。そこにはウチの高校の制服姿の女が立っていた。

「何で来てんの」

相手の顔を見ないで素っ気なく答えた。

「妹から全部聞いたわよ」

そついうとベッドに近づいてくる。

あのボケ余計な事をいいやがって、と思ったがさすがに言うわけにもいかない。

「何で言ってくれないのよ」

「何を？」

カマをかけられたら困るから最新の注意を払う。元々カマをかけられることには充分に注意深くしているので新しく警戒線を張る。

「何であんな危ない真似をするのよ。バイトのことも聞いたわよ」

あーあ、全部話してやがる。俺はそう思う頭に手をやり溜め息をつくとベッドの側に来

た藤咲に目をやる。やはり怒っているらしい。

「俺に助けられてそんなに不快かい？」

「そうじゃないわよ」

「黙ってて悪かったと言いたところだけど、何も言う必要はないだろ。妹のときだつ

て、忘れさせて夢で何もなかった感じにするつもりだったんだから」

「そういうことじゃないわよ」

なぜか藤咲は甲高い声で泣きそうになっている。

「面倒だつて言いつつ、結局はいつも学校の時みたいに全部背負いこむのはやめてっていつてるのよ」

語尾が強くなっている。普段は怒らない藤咲だが、これで怒られたのは2回目である。

「面倒なことが逃げてもかってに向こうからやってくるんだよ。」

それに何でお前に言われなきゃいけないんだよ」

俺がそういうと、とうとう泣き始めた。今回だけは前みたいに折れる気がない。

「俺は自分のためにやってるんだ。人のためにもなるんだから言われる筋合いはない」

そういうと藤咲はてのひらで頬を触る。それはとても甘い感じがするが、ヒュノプスに

飛ばされた時よりも痛かった。

「バカ！ 心配したのよ。この三日間寝ないでずっと」

そういうとやはりとうとう泣き出してしまふ。感情が高ぶるとすぐに泣くらしい。

ただ、素直にうれしかった。今まで誰にも言えなかったし、言わなかったし、苦しかつ

たし。そう思うとふと夢の最後の言葉が蘇る。

「俺もずっと好きだった」

俺はそういうと、藤咲を胸に寄せ抱きしめた。

「皆と同じ様にフラれたら怖かったし、何よりも面倒なことから逃げていただけだった

んだ。他の男子からの目もあったし」

藤咲の顔が熱くなっている。熱でもあるのだろうか。おそらくそれを聞くと殴られそう

な気がするから黙っておこう。うん。

「それよりいつ退院できるか知ってる？」

「知らないけど、2、3日以内にできるんじゃない。3日も寝てれば治るでしょ」

「そっか」

そういうと俺は藤咲を促し、車いすに乗せてもらい表に出ようとする。

だが、当然のように許可が下りなかった。

窓を開けるために藤咲が窓際に立つ。

開けられた窓から庭園がベツトからも見え、そこには美しい藤のはなが、みごとに咲き

誇ってあざやかな紫いろをしている。

「綺麗だ」

俺がそういうと藤咲はまた顔を赤くする。

「せっかく藤の花が綺麗に咲いてるのにそこに立たれると見えな

いんだけどさ」

そう言われ藤咲は怒ったように近くにあったコップを腹へ投げつけてきた。

「死ぬって」

腹へ直撃し悶絶する俺をしり目に藤咲は頬を膨らませ何も言わずに帰っていった。

エピソード

エピソード

1

「コウちゃん、そろそろ中韓テストだよ」

「そうだね。でも、いつから外国語のテストが2つだけになったの？」

俺は中間テストが近いことだけは知っている。

「とりあえず、ちよっとノート貸して。今日勉強しないやつでいいから」

俺はカトケンから今日のノートを借りる。

「いつも思うけどさ、よく授業中にほとんど寝てるのにあんな点数が取れるよね」

「睡眠学習の効果はすさまじいからな」

俺はそついうと大声で笑う。

そしてチャイムがなると相変わらず俺は寝る。

結局、寝たまま学校を過ごすのがいつもの日常。

だが、テスト前だけは必死に勉強をする。

眠い目をこすり学校であつても家であつてもひたすらテスト範囲を教科書からノートまで

で参考書を片手に全て読む。

読んでる時に誰かが話しかけてこようが基本的に聞こえてない。というか、話しかけられないオーラを出して必死に勉強する。

「あいつ、またテスト前だけ勉強してるぜ」

クラスの男子に言われようが気にしない。少なくともお前らよりは点数が良いんだ。

その言葉も俺の場合は馬鹿にされて言われることが少ない。なぜならその後には必ず、こう続くからだ。

「普段から勉強しとけばもったいい点数を取れるのにな」

ほつとけ、と思うが俺でもそう思うから何も言わない。カトケンから後でクラスのこととか聞くとこんな話ばっからしい。

中間テストはまだマシな方で期末になると科目が倍近くになる。それだけ目を通すのがしんどいことになる。

ちよつと疲れたので息抜きにのびをする。そこへオーラを感じてハズなのに話しかけてくるやつがいる。

「アンタ、短期で勉強しても知識で身につかないわよ」

クラスの委員長をしているこの女は面倒くさいことにかまってる。

「入院してたんだからしょうがないだろ。必死に勉強をしないと点数が赤い方に近づいてマズイことになるだろ。授業中に寝てて怒られる事態になったらどうすんだ」

「寝ていられる方がおかしいでしょ。それに普段からやつとけばいいでしょ」

あーあ、やつぱ面倒くさい。自分でもわかってるつつーの。

「とりあえず、今は忙しいから」

俺はそういうとまた勉強する姿勢に変わる。とりあえず、委員長はどこへ行っただ。みたいだ。

そんなこんなで学校が終わるとテスト前でバイトはないから家に帰り、犬を散歩に連れて行き、一家団欒で夕食を食べ早めに食べる。

入院すると食欲が増えたり減ったりするらしいが俺には影響がなく、前と同じ量を食べて、終わり部屋にこもって勉強を始める。教科書とノートを一通りながめ、フォンスを連れて来て一緒に寝始める。

入院してからは親も妹も心配してくれているが、事の発端については家族全員には何も言っていないから知らない。フォンスは居候で家族と見てないから除外の方向で。

「お兄ちゃん寝てる間に鉄骨が刺さるって意外と間抜けだね」
なんて笑われている。心配されているはずなのに何で間抜け呼ばわりなんだ。

いよいよウトウトし始め、寝る態勢に入るとタイミング悪く携帯電話がなる。番号を見ると俺は溜め息をつく。

「ただいま、留守にしております。御用件の方はそのまま電源をお切りください。FA

Xを送られる方はFAをSEに代えてお送りください」

「なに馬鹿なこと言ってるのよ。それにストレートすぎるわよ」
相手はそうやって少し声が小さくなっていく。

「それで御用件は？」

「えっと、ノートとか貸してほしかったら言ってね。ザッキーが休んでいた間の分はしっかりとってあるから」

休んでいた分はってなんだよ。普段はとってないみたいな言い方だな。だが、それを指摘すると話が長くなりそうだから言わずに心に留めておく。

「カトケンので足りてるからいらないです。徹夜組の俺には時間がないからおやすみなさい」

「徹夜なのにおやすみつてちょっと」
途中まで話を聞いただけでおれは通話を切る。何を言いたいのかなんとなくわかるし。

そのまま布団に入っただけで寝転がっていると意識が薄れていく。

2

「さて始めますか」

俺はそういつとさつさと机をだし勉強を始める姿勢になる。

夢の中で勉強しても俺には現実に影響を与えるのを使った勉強法だ。バイトを始めた時

に、テスト前のバイトを休めることと夢の中で効率よく勉強するやり方を教えてもらうという

いうことを店長と約束していた。

だからカトケンに言った睡眠学習は嘘ではなかったりする。

「さて、教科書とノートでも出すか」

ボン、という音と共にだし、ノートの表紙にはカトケンのお気に入りの絵が描かれてい

る。学校でこのノートを広げると誤解されるのは間違いないが、テスト前だけしか広げる

事がないので特に何も言われない。みんなわかっているんだろう。

「首輪をまた違うのに代えたと思ったらここなのか。僕が暇になるよ」

「寝てればいいだろう。別に勉強の邪魔だけはしなければ、何をしても良いよって言

ってるんだしさ。邪魔以外ならね」

俺はそういつとさつさと勉強を始める。執り^とかかる。執り^とかかり

たい。始めたい。やり

たい。やめさせたい。

「そこ、カリカリするな！ さつきからカリカリ、ホリホリしやがって」

「寝る場所作ってるんだよ」

フォンスは短い手で一生懸命穴を掘って自分の寝床を作っていた。だが、うるさい。

「ほら、これで寝れるだろ」

市販されているキノコ型ハウスみたいのを出してやると、フォンスはそこに喜んで入っ

て行って丸くなる。狭いところに丸くなって寝るのが好きらしい。

「そんだけ狭いところが好きなら、里親に出して狭い家になっても充分に暮らしていけ
そうだな」

寝かけていた目をパチリとあける。

「ずっと穴でも掘ってようか？ アナグマ犬だから掘るの大好きだよ」

「わかった。お前はずっとウチの犬だ」

それ以降グツスリ眠りに入ったらしく、寝息しか聞こえない。

その間に必死に教科書を読み漁り、ノートを見ながら覚える。

この勉強法で一番の難所は理科と数学だ。数学は式を覚えても応用させなければならず、

式の暗記だけじゃどうにもならない。パターンを覚えてもそれだけで完璧には扱えない。

理科に至っては生物のテストだけなら喜んで受けるが、科学と物理はちよつとキツイ。片

方を選択科目から外しといて良かったと素直に思うが、カトケンも生物を取ってないから

生物は教科書をひたすら読むだけになる。

ということ、文系を後回しにして理系を中心に勉強を進めていかなないと痛い目に会

う。数学以外は教師も首を傾げているはずだ。寝ている生徒がなぜ

成績がいいのか、と。

「こうかい。オシッコ」

「勝手にその辺でしてないさい」

フォンスは俺の足元に来て片足を上げる。

「わかった。出してやるから少し待ってろ」

現実と全く同じペットシートを出してやる。フォンスはありがとうというところで片足を

を上げし始める。そしてまた自分のキノコ型の小屋に入りまた寝始めた。

その様子を見て俺は微笑む。すごくかわいい、とこれがいつもフォンスのしぐさや寝顔

を見ている俺の感想である。

3

そのまま朝になると、竜崎は勉強したことを思い出すしながら、真つ白な問題集に目を

通す。ほぼ完ぺきであった。

これならテストでひどい点数はとらないだろう。そのまま散歩をして学校へ行く。

明日と明後日と別の科目を勉強で繰り返し、テスト前日に問題集をやる。これが竜崎のテスト勉強である。

「明日からテストで今日は半日か」

「そうだね。それで勉強ははかどってる？」

加藤は普段から勉強している余裕からか竜崎を心配して聞いた。

「バッチリ、問題集もほぼ問題ない。カトケンといい勝負になりそうだよ」

「むりむり。コウちゃんは理系が得意じゃないじゃん。一夜漬けだけで絶対に僕には勝てないよ。日々の積み重ねがないとね」

そう言われ竜崎は素直に負けを認めるしかない。

「普段から勉強してる人間と一緒にするなよ」

竜崎はふてくされてそうは言ったものの絶対に加藤の方が正しいので、周囲と一緒に話していたクラスメートたちは呆れていた。そして一同揃ってこう言った。

「普段から勉強をしないお前が悪い」と。

眠い目をこすり必死に勉強をする。テスト前でなければこの光景はまず見られない。

夢の中で3時間程寝てはいるため倒れることはないが、やはり眠いらしい。とうとう寝てしまう。

「おい。起きろ。もう授業終わって担任が入ってくるぞ」

「うーん」

竜崎はグズグズしている。まだ眠いらしい。そこへ藤咲がやってくる。

「起きなさいよ。担任がくるわよ」

ゴンつと頭を勢いよく殴られた竜崎はすぐに起き上がる。

「いってーな。何すんだよ」

「起きないアンタが悪い。担任の前で寝てたらこれよりヒドイことになるわよ」

竜崎はそれを聞くとおとなしくなった。あの先生なら確かにこれ以上ひどいことになる。

授業中に寝てる分には何も言わないが、ホームルームで寝ると泣き始めて1時間は帰れない

くなる。さすがにそれはやってはいけないうちになっけい、クラスではそれを回避するの

に暗黙の了解で無理やりにも起こすことになっている。
担任が教室に入ってくると話初め。そのまま下校した。

家に帰り勉強をしていると電話がかかってきた。

「なんだよ、今度は睡眠だけじゃなくて勉強も邪魔するのかよ」

「あれはザツキーが寝てて、皆が帰れなくなると面倒でしょ？
だから起こしたのよ」

「まあいい。それで用はなに？」

そういうと、藤咲は少し黙り込んでしまった。

「用がないなら切るぞ。普段から勉強している君たちとは違って
俺には時間がないんだ」

「待って。テスト終わったら暇な日あるでしょ。どっかいけない
かなって」

そう言われ竜崎は側にある手帳で予定を確認する。

「あ、あいちゃってる日があるけど、藤咲は忙しい日だと思うか
らたぶんどこかへ行く

のは無理だと思うよ」

「何でザツキーが私の予定を勝手に立ててるのよ。それでいつ？」

「テスト終わった次の日曜」

「それなら力オちゃんも服を買いに行く予定だったけど、別の日
に代えるわ。ママを助

けてくれたお礼もしていなかったし」

「おい、それだけはやつちゃダメだ。おー……」

「それじゃあねえ。バイバーイ」

電話を切られてしまった竜崎はしばらく携帯を見つめる。

「やっぱり」

竜崎はしばらく浮かない顔をした。

「もしもし。日曜日にお姉ちゃんと出かける竜崎さんですか？」

「ノー。デイス、イズ、ア、ペン」

「中学生で習う英語で意味不明な人のフリとかいらからですから」

「それで、何の用だ」

「えっと、二人が出かけている写真を後ろから撮りたいなあって
思いました」

「おい、それだけはやめろ」

「じゃあ、わかってますね？」

「どうせ、もう断れないんだろ。それでどんな人なんだ」

「それも当日にしましょう。そっちの方が竜崎さんのにもやりやす
いでしょうし」

「テスト終わった後の翌々日でもいいな。テスト当日は友達とカラ
オケに行くから」

「はい。それでいいですよ。じゃあ、またあのファミレスで」

電話を切ると竜崎はまた面倒なことになったと感じる。

藤咲の妹の花桜梨は悩んでいる友人がいると竜崎へ電話をし、そ
の人と竜崎を合わせ自

分はドリンクバーとケーキを食べる。もちろん、お金は竜崎持ちに
なる。

そして、ファミレスの常連からは、またあいつ違う女を連れてい
ると敵意剥き出しの目
で見られる。

竜崎広界は面倒なことがめんどくさがっている竜崎本人の所へ転
がりこんでくる性質で、

藤咲花桜梨は面倒なことを周りの人へ押し付ける性質をもっている
ために竜崎がかっこう
の餌食になっている。

退院してからこの一か月で10人以上は話を聞いている。聞き上
手な竜崎は相談される

とひたすら話を聞き、解決案をだしてしまうので花桜梨を通じて人
が集まってきてしまう。

本人にとっては非常に面倒ではあるが、めんどくさがって断るとも
っと面倒なことになる

ので仕方なく花桜梨の話を受けている。

そして藤咲花桜梨からの電話の後は普通に勉強ができ、そのまま寝る時間になり夢の中

で問題を解く。夢の中では頭の中に辞書がはいっているようなもので、楽々解ける。それ

を現実の世界に引つ張り出してテストで使うだけである。

テストは終わり、みんなで自己採点をしてみると竜崎はいつも以上にできがよく、加藤

に迫る勢いの点数を出していた。

「5点の差か」

「総合点でカトケンと5点の差じゃ上出来すぎるだろ」

一緒に採点していた彼の友人達から一斉に言われる。

教室でやった採点会のようなものも終わり、そのまま友人達とカラオケにいき夜まで街を

練り歩きそのまま解散した。

翌日には藤咲と遊びにいく予定が入っていた。

竜崎は寝坊すると怒られるから早めに眠り、朝を迎え傘をさし出かけて行く。待ち合わ

せ場所にはその場だけ太陽が降り注いでいるようなとても輝いている女性が待っていた。

「まず、その服をどうにかしよう。じゃあついてきて」

「え、いいよ。服はこのままで」

「ダメ。せつかくだから買うの！」

竜崎はそのまま女性に手を握られ引つ張られ電車に乗り都心へ行く。

その日、一日中手を引つ張っていた彼女は笑顔でいた。その傍らで彼はその笑顔を見て

このまま楽しい時が続いてほしいと願う。

そして、日が暮れ別れの時が来ると、丁字路で竜崎たちはこんな

会話をした。

「今度は晴れてる日に行きたいね。海の見える公園とか」
彼女はそう言った。

「そうだね。晴れてる日に一緒に行こうか」

「うん」

竜崎は素直にまた会いたいという気持ちを表し、彼女の体を自分の傘の中へ引き寄せ抱きしめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8809y/>

枕営業

2011年11月26日16時47分発行